標注

榮花物語抄

五

駒くらべのこゆき　この巻ハ高陽院ハ於て競馬あり後一條天皇行幸せさせられしをりけり

高陽院　拾芥抄中末ハ中山門南堀川東南北二町南二丁後入高陽院皇太后とあり

標註

榮花物語抄巻五

小中村義象
関根正直　標註

廿三　駒くらべの行幸

（万壽元年）はつなく九月にもなりぬ。（頼通）関白殿高陽院どのにて駒くらべせさせ給ひて、行幸行啓あるべき御いそきありいとゝみじきとのゝありさまを、心ことにはらひみがゝせ給ふ程、いへばれろかにめでたし。此世にいゝ冷泉院京極殿などをぞ人れもしろき所と思ひたるに、此高陽院殿のありさまこの世のことゝ見えず。海龍王の家などこそ、四季ハ四方にみゆ也。此殿ハそれにれとらぬさまなり。れいの人の家つくりなどふも

たゞひたり。寢殿の北南、西東などふハ、皆池あり。中じまふ釣殿たてさせたまへり。東の對を、やがてうまばのれとゞにせさせ給ひて、そのまへに、北みなみ樣に馬場せさせ給へり。めもはるかに、れもしろくめでたき事、心もれよばず。まねびつくすべくもあらず。をうしうれもしろしなどい是をいふべきなりけりと見ゆ。繪などよりハ、これハ見所ありてれもしろし。大宮上東ハ京極殿にれはしませバ、九月十四日の夜、やがて高陽院にわたらせ給ふ。常よりもいこしあざやかにめでたうてわたらせ給ふ程のぎしき有樣ハよそひかべてならず。つねの行啓ふすぐれたり。女房車廿りやうあり。この殿のくさ木もはづかしうたぼさきて、か

大床子　食物を据うるれやうの長さ六尺

くたつくさせ給ふなるべし。日ごろ雨などふりつゝど、けふしも、空はれ月くもりなくかゞやけるに、女房のなり、袖ぐち、夜めにもたるくいへバおろかにめでたうれはしましぬ。寢殿の南のはしのつまに、ハこしよせてれりさせ給ひぬ。ハともの上達部殿上人、皆もの、などまゐりて、祿かども給ひそまろで給ひぬ。さて日ごろれをしまれに、れなじ月の十九日、駒くらべせさせさ給ふ。日ごろだふありつる人、けふハとりわきめでたし。みかどのれはしますべき大床子、寢殿の南れもてにたてゝ、御座よそひたり。巳の時ばりにぞ行幸ある。御階に御輿よせて、たりさせ給ふ。さてれはしまして、ゐさせ給ひて、春宮れはします。陣のとよて

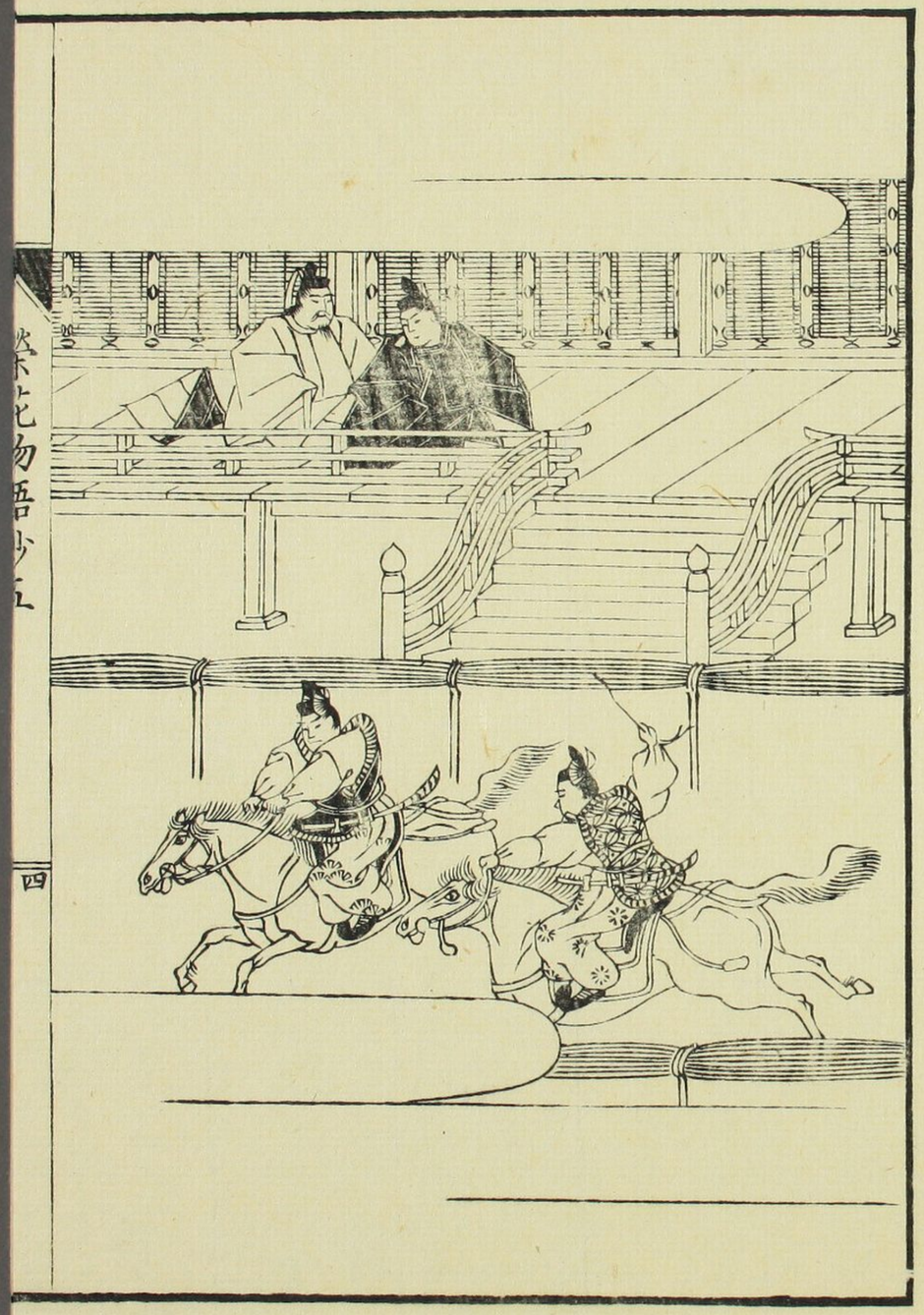
事のよし奏して、ひ車陣にてかきれろして、莚道まゐりてれりさせ給ふ。西の廊のなゝのつまどふういらせ給ひて、西の對のすのこふうとほりて、わたどのゝすのこをわたらせ給ひて、寢殿に南れもてふり、いらせ給ひて、御座につゝせ給ひぬ。東宮の御座ハひらざなり。みすのうちのありさま、思ひやらるゝまし。宮のわたまへの待ちみたてまつらせ給ふらん。思ひやりきこえさせぬ人なし。入道殿ハ、東の對の北のかたにふりて文殿あり。そこふミすゝけたり。さるべき侍ども、れほく具してれはします。宮の女房のありさま、寢殿のにゝ南れもてふり、西の渡殿まで、すべていとれどろ〳〵しう、もみぢがさね色をつくしたり。つねのゑ

ひらざ　平座なり　天皇の御料ハ大床子をもゐて御椅子を立て東宮のハ平座にゐつらひさるなり

そゝひ　蘇芳菲とゝく元食周の樂の名なり傳奏淳ゆゑ　むこまかゝ其駒ハ神樂歌なりいづれも拾芥抄上末音樂部ゐえゆ

ひへぎ　上衆小袖　しく袍せり

どもなれバ、いひつくさず。西のたいゝゝ上達部つき給ひぬ。さるべく皆ものなどきこしめしまゐりて、やう〳〵ふなかくどもこぎいでたり。そはひ、こまかた、其駒ふどさもゝ舞ひいで、いまい東の對にわたらせ給ふ。又そこにて大床子にれはします。もこしさりて東宮れはします。平座なり。あるドのれとゞをはじめたてまつり、上達部殿上人みふひきつれて、東の對ふまゐり給ふ。いづれの殿ばらもみふゐ裝束めでたきふかに、蘭白どのゝゐ方たがさねの、きくのひへぎかゞやきて、目とゞまりたり。くらべうま十八番なり。なまよろ〳〵き折のだに、のり人も馬もいみじういどみて、とみゝやいづる。むまの心ちもいとゝいみじう世ふ



めでたしと思ひて、とゞもすきバいでゝハひき入きく
もるほど、いとゝみじう心もとなく見えたり。さての
みあるほども久しけきバ、やゝたびく仰せらるれバ
出そめて、たびくに成りて、左右かたみにかちまけす
る程の亂聲のおとも、はゝたなげなるまでをかしが
ちまけの乘人のかつけものゝほどなど、かさわきて
いどみたり。又やがてこのなゝのとゝねりどもかた人
して、東宮の帶刀どもあひまゞりて、騎射いさせ給ふ。
勝負の舞などもをゝしうてはてぬきバ、樂所の物の
ねども、くらうなるまゝ、ゆゝしうぞうれもしろし。ゆゝ
じまにぞ樂所ハせさせ給ひける。上達部殿上人など
も、いにしへ中頃などのゐれば、え給ふハ、またあゞり

ても、かゝることゝハ見ずなん有しなど、いみじうめで
けうゞ聞え給ふ。事どもはてゝ夜ふいりてかへらせ
給ふ。ゆゝしくゝ物ども、ゆゝ心の及ばせ給ふかぎりせさ
せ給へり。かんだちめ、禄、殿上人のかつけ物などよ
にたぐひなきまでせさせ給へり。家司どもさまぐに
よろこびたたり。はつゝの日ハ、きのふのこゝをゝを
ひしうれぼさるゝに、あゝずめでたかりし事をきこ
え給ふ。上達部參り給へれバ、あるじのとの、いみじ
うもてはやし聞えさせ給ひて、ゆみきなどきこしめ
して、やがて宮ゐのたに參らせ給へり。夜ふくるま
まに、月もしろく曇りなくて照りわたりたるに、き
のふのゐたゞ心ちにのみれもひく、かきとゞめずハ

くちをしかるべし。為政ばかりぞ、つうまつらんと、殿
れほせたまひて、ロ宣にめしいでゞ、うゝせ給へハ、式
部少輔文章博士内藏權頭よゝゝげの為政、かきたう
したてまつる。

ふしゝげの為政
ふしゝげハ氏ふり
慶滋とかくさて此
時の題ハ支岸菊久
董といへる之又此
の假名の序ハ扶桑
拾葉集巻三にも載
せさり

れほきゝきの宮、あめのしたよみうさ山といたゞ
かれたまひ、日の本にいはゝきゞとたちさかえれ
はしまゝてより、ゆくすゑたのもしきを、れほはら
の千年を松の風にふきつたへ、朝ゆふよろこば
しきを、ありすがハひとたびもめる水の心のどけ
き世に、れほくのまつりごとをすべれこなはせた
まふ。左のれほいまうちぎこも、いもせの山の雲へ
だてられぬ御なからひなり。こゝに百數のひんが

し、幾ばくもさらざる程よいよしへよりもぐれたる
所に、あたらしき花のいらかをつくりつゞけ、ゑの
うてなをみがきなして、あやしき草木をほりうゑ、
かどあるいはほ石をたてならべてやまをたゝみ
池をたゝへしめ給へるを、ロらんぜさせ給んとて、
長月の十日やうゝに、あらさまにわたらせ給へ
るが故に、わがすべらぎもきのふみゆきせさせ給
ひくひねもすにロ遊びありて、あくるけふハこゝ
ろのどかに、秋の空もくもりなく、夜はの月かげも
くまなく照らせり。今あまたの上達部殿上人參り
つどひて、きゝの菊久しくにほふといふことを題
にて、和歌をたてまつらせ給ふ。此ことをかきたる

さんすいためまさなめりと仰せたまはす。ことばの林もれい木になりて、花のねにかへもひもわもれにけり。ことばの泉もあさくなりふけもい、人なみならぬ水ぐきをあはれと覚しめして、あら玉のとし立かへる春のあがため〳〵ふ、かずまへとゞめたまへとしら申す。

みどりなる松のよはひをあらそふハ、
　みぎたるふほふ志らぎくの花、
　　関白殿

わゞやどのき〳〵ふにほへるきくれ花、
　久しき君ゞかげぞ見えける。
　　中宮太夫

れちつもりふちともならん岸ちゝみ、
　浪間ふみゆるきくの志ら露。
　　民部卿（齊信）

岸れれもふ波れりかくる菊のはな、
　いとゞ匂ひぞ久しかるべき。
　　春宮太夫（頼宗）

をちこちのきしにかれせぬきくの花、
　幾世の秋ふあはんとをらん。
　　中宮權太夫（能信）

きくの花池の志ら浪たちかけて、
　ふゝに流れて匂ふべきかな。
　　閑院右衛門督（實成）

いとゞしく千代をかぎりてすむ水よ、
久しくにほふちら菊れ花。
皇太后宮大夫（道方）

白ふゝりにほひをそふとみなそこふ、
すゑてぞかをるちら菊のさな。
權中納言（長家）

ちら波のはなもろともふきしの菊、
ふるれ秋よにほふやどかな。
左兵衛督東宮權太夫（公信）

菊れをなにほふあたりの水ゐ面ハ、
ちよまですまん紅ぞうえける。
皇太后宮權太夫（資平）

よろづ世のきくに色そふ我きみの、
千年のほどをれもひこそやを。
右兵衛督（經道）

つきもせぐにほへるきゝの菊なれバ、
君ゞちよこそ思ひやらるれ。
左大辨（宣賴）

つきもせず白へるきゝの ちら菊を、
千歳のつるれるかとぞ見る。
源宰相（朝任）

きゝにきくきくの白をひさしとも、
君ゞ千代ふぞ志るべかりける。
閑院頭中將（公成）

ゆくすゑふにほはんほどい菊の花、
たもの流をくみてこそしれ。
左頭中將（頭基）

いけ水よにほふとみえしきくなれど、
松のともとなりにけるかな。

なゞれゆくすゑの世までにつきもせず、
さして白へる岸のむら菊。
辨のりたゞ（義忠）

こよひの上達部の禄、宮のゐ方よりせさせ給ふれい
のまうけのものどもなり。あるじのとの、ゐかはらけ
すゝめて昨日につきにけりとて、ゐ方よりいつへゝ
へのおりものゝうちき、小袿などをぞ奉らせ給ふ。夜

ふけていみじうゑひみだれつゝいで給ひぬ。けふの
すのいみじう物のはへなくくちをしかりつるハ、内
のれとゞの參り給はぬ、四條大納言（公任）の參らせ給はぬ
をなんたぼしめず。殿原も同ど心ふたぼし聞えたま
ふ。

ゑ（西）わらぐえ

はらなくて萬壽二年正月になりぬ。空のけしきもひ
きかへ、心のどかなるに、枇杷殿（姸子）にハ、ことし大饗せさ
せ給はんとて、いそゞせ給ふ。女房達なにわざをせん
と、いひ思ひたれど、このたびのことにハ、ものぐるほ
しくさまあしきすなくて、たゞうるはしうと、の給は
するに、ついたち二日、臨時客とて、その日女房かずを

ゑらぐえ　流布本若枝とあ。ゑ大鏡の目録ふハゑらえさ。ゑらゝ分金澤本繪入本おもよび一本ふ後つゝ名のよしハ歌の初ふるかゝ文ふくゝし

大饗　二宮大饗とて后宮東宮ゝゝ群臣へ饗膳を給ふなり正月二日ふ物まるを例とす

臨時客　公事根源

ふ云くこれハ摂政関白家ゐ春の始め大臣上達部を招引して遊び侍ふと定まれる公務ゐもあらねバ陰時と申ふやまゝ花宮餘情ゐ云く陰時と云ふも正月二日三日のゆゑに関白大臣の第一の客の不慮ゐ来るを云ふさて陰時客とハ名付るゝ其時ハ催馬楽朗詠肩ぬぎなどあり楽器をめさず笏拍子ゐてうたるものゝ云々関白殿のうへの四をぢにこそ云〻按ずるゐ隆子と寛定とハ従兄弟の間なりされバ四をぢの子にこそとありしの子の二字おちたる歟系図左の如し

為平親王（四宮）―寛定（七宮）
具平親王―隆子

つくして、いろ〳〵をきたり。御几帳、皆くちきゞたの、いみじうあをやかにめでたきもこのはるにハ、うもれ木もなきにやと見ゆ。はゝなゝついたち七日もすぎぬれバ、頼通関白どの〻大饗ハ、廿日なるべし。このみやの（師子）ハ、廿三日とさだめさせ給ひて、われもゝ、れとらじまけじといそぎの〻しりたり。関白殿、としごろ四ろとい〻ものゝもたせ給はぬなげきを、入道殿（道長）倫子うへまでよ思しめしたるに、故式部卿宮（為平）の御子の、右衛門督（憲定）ハ、関白殿のうへ（隆子）の四をぢにこそいはしけめ。その君、人にれむなしきさまにぞたばえ給へりし。有國の宰相のむすめのはらに、女子ふたりうませ給へりしを母もうせ給ひけれバ、父君ハ、年ごろとかくしありき給ひて、それもうせ給ひにしゝバ、その女君たち、今ハむげにたとなに成給ひて、いとゐしげにてありときかせ給ひて、頼通関白どの〻四ろ隆子うへ、ゑらぬ人かはとてむかへさせ給ひてどの〻四まうなひ、御ぐしまゐりなどに、ふた所ゐゞらさぶらはせ給ふ程に、あね君ハ致仕の大納言重光の御子の、則理をかたらひたりけるほどに、尾張の守になりふけれバ、尾張へいにけり。わと〻の君ハ、わざとなもつけさせたまはで、たゞすみ給ふまゝゐ、たいのきみとぞめしける。このきみに、殿おのづからむつましくなゝらせ給ひにけり。御心ざしのあるさまに、めざましきゝどもありけきバ、うへこと人ゝりハ、さやハなどめざましゝげなる御けしき、かたはらい

たくて、やう〳〵さとがちになりゆけバ、さるべきにや有けん。ことく〳〵いうへの御けしきにもたゞひ聞えさせ給ふに、このゑばうりハ、それにさはらぬさまに、ともすゝバ御ありきのついでにも、立寄りたまふ。ひるなどもかきまぎれれはします程に、たゞにもあらずなり給ひふけるを、世れ人いとめでたきさいはひ人ふいひ思ひけり。此頃ぞ子うむべかりけれバ、関白殿さるべき事などれぼ〳〵おきてさせ給ひける程に、男君むまれ給ひぬべ〳〵といひのゝしれバ、とのハかたはらいたくて、口みづからハ、えれは〳〵まさねど、たばつゝなさの口使ちきりもけり。かゝるほどに、いとたゞらかに、大道房をのこ君ぞ生れ給へりける。殿きこしめす

ふ、あさま〳〵きまでれぼされて、口はゝしなどつかはす程ぞめでたきや。大道長殿もうれしきことにれぼしめして、七日だにすぎぬバ殿のうちにむゝへさせ給ひて、そこにて、やしなひ奉らせたまふべく、れぼしめしけるゝ。うぶやの程のゑどもゝ、さるべき國のゝゝどもにれぼせられて、みなそこより志のゝ志りたり。さは世に、かゝるさいはひ人もありけりと、のゝしるもげふとみえたり。入道長殿ゑり、かくのたまはせたり。

とし志をへてまちつる松のわかだえにうれしくあへる春のみどりこ」口返きこえずれぼつかなし。口めのと、われもく〳〵とのぞむ人ありけれど、故伊賀守橘資成のすけなりといひし人のむすめ、遠江守たゞ志げ源忠重ゞむ

とし志をへて云々
巻の名ハこの歌の初ふの心
大鏡七日七夜の事ハ入道殿せさせ給へるにつゝもしけるゝ
年七へて云々

みちと東宮をまちたてまつりてハこれぞうまごのをきこそわがて出ゐらえ名残をさ君とつけをきたまはせ給ふ云ことゝ

刀自　とじい古いさゞ女ふ云へる絲とゆゆるを此頃よう下仕まる女の絲どなれりとゆゆ薩戒記ふ内侍所の刀自などあるハ正しく女官なり又をきめい和名抄に専目

水紀云専領太宇女平五女と云ふ下仕の女の中ふても殊に賤しきを云ふと兄ゆ源氏物語梳箱子などにをさめた厠人と云ひつゞけなり

そもゝ紀伊前司なり宣のうゝめぞたゞいまはまゐりたなる。殿道長たはしまして出覽じけれバ、かぎりなくたぼされけり。殿うへいみやくれ刀自をさめにても、此時こをだにうみたらバ、我あるをりにとく見んなど覽しの給ひけれバ、これいましていやしからぬ人なれバ、かく覽しめすさまなり。かうて、びは殿のこやにハ、廿二日のよさり、廿三日のあゝつきなどにぞ、里の人人まゐりこむ。廿二日に、寢殿の東のたいなどの出裝束、關白殿の大饗にことにかはるをきにハあらねど、出ひき出物の程ゝはる。又上達部のはゝめハ東の對ふつゝせ給ひて、のちハまへの南れもての、すのこふこそハたはすべけれバ、さやうのゑこそゝはるべき。甚日になりぬれバ、日ごろいつしこのとまちたもひたりつるわゝき人こバ、まさ人のきぬの色に浸ひふやおとらんまさらんのいどみむねさゝがしかるべし。つぼねたてさぶらひつきたる人くハ、つぼねなごらよろづを志いそぎたるにさとれ殘りのひとゞは參りて、臺盤所にてはかなく屏風几帳ばゝりをひきつぼねて、ひまもなくゐたり。まさをのくとくいどもハ、その局々にいきつゝぞゐたりける。つぼねにを又物縫ひきゝぎて、あないみじやかゝらをだにこそつくろはねなどいふもあり。また志はてたるハ、をぐろめつけなどこゝろのどこのふ我身のけさうをしみがくもあり。扇なども給はせたらんハ、そさうにぞあ

さやうのゑこそかゝるべき　こそのかゝりをきと強ふハ日本紀の爲なるとふもゝりて古格ふう

ひきつぼぬ　この河の解上ないつり

をぐろめ　これも上ゝ注せり

そさう　龍相とかきて精好ならぬを

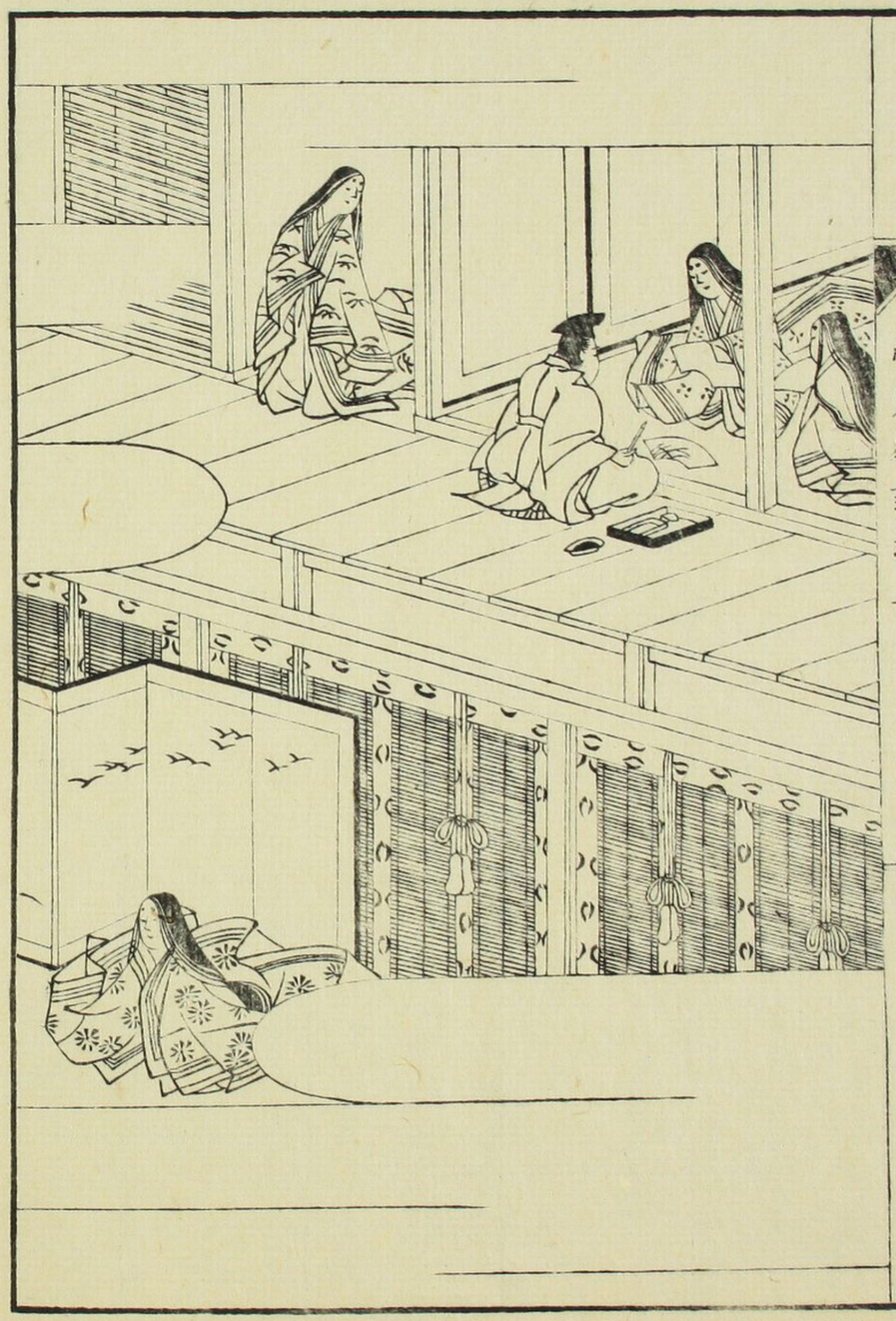
いふ上より給える扇ハよからぬものらんとておのゝ私小扇の細工を挑ふるふしく　おかんのハ　四月のいいろゞとなり

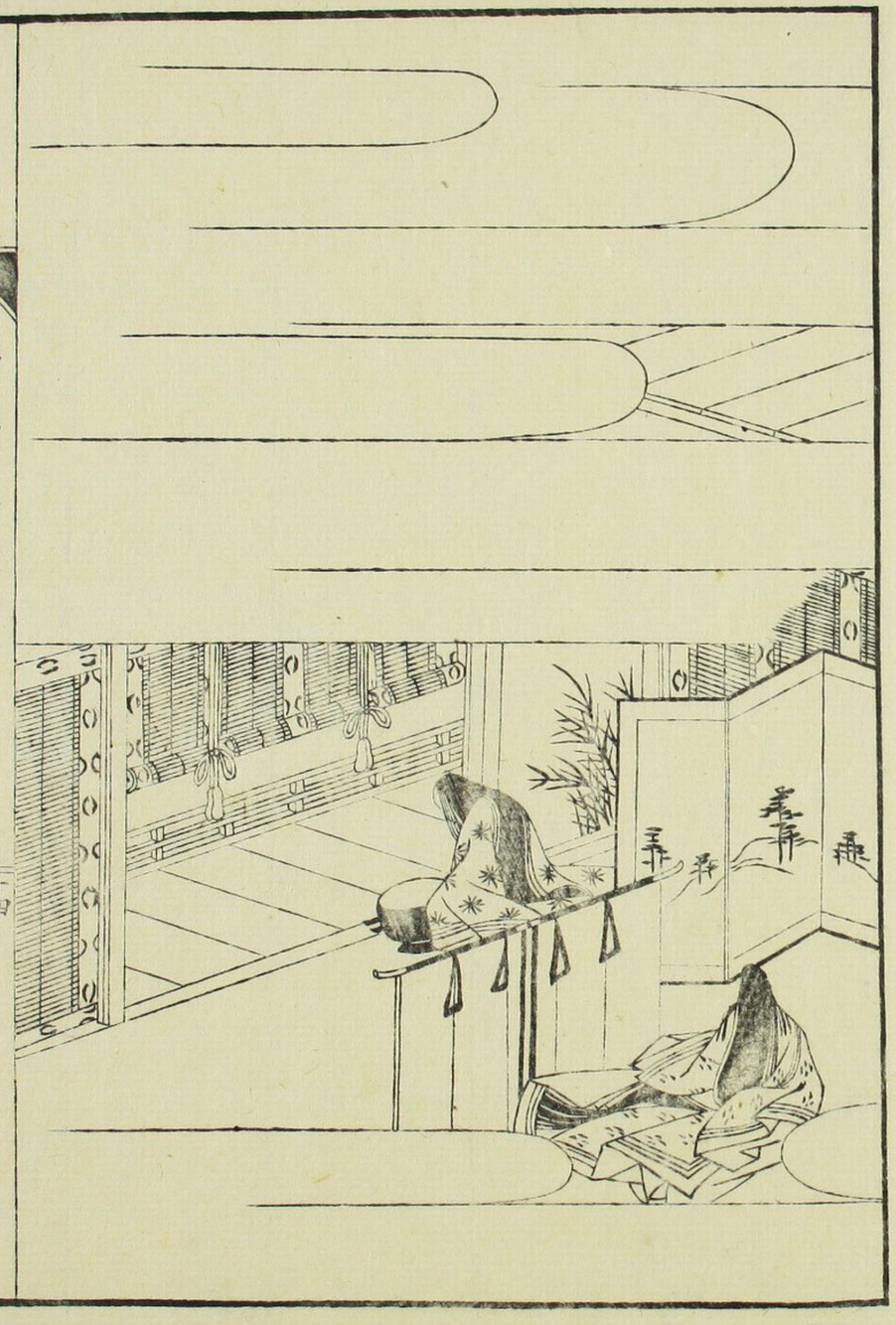
らんゝしなど思ひくさるべき人々にいひつけ、わゞ繪師にかゝせなどしたる人ハ、その心もとゝがりをしあるハ、れほんのハいこゞし給へる。まろゞ物の思ふさまならぬ。うちものゝつやきだめ、織物のもんをもてきゝぐに、色ゆるされなどしたる人ハ、志たりゞほに思ひくだ〳〵のけたるさまなり。きらぬがこれをもゝどかしげに思ひて、心のかぎりハおとるべきすゝハ。唐ぎぬ、どすれどもかくもれどもむもんにてあるハ、かたもんもかものけざやかに、うかばぬなげきをたたり。あけぬれバ、硯々のみかうしあげ、裏戸おしあげ半蔀あげひらきて或ハ髪をつくろひ、顔をみゞきなどさゝぎたり。又みきバ、いみゞうれほきなる

けあげ給ふる　上氣まる匂れとふり源氏神巻に宮ハ物をいとゝびしと思しけるにはをあゞりて猶なやましうせさせ給ふとなるも同語なり

そこら　おかくといえんゞ如し

袋つゝみなどもてさゝぎたり。又みきバ、おゞもち、唐櫃のふたゝいとれどろ〳〵しうたゝみいれて、うちかさねて、ふたりなど畳きてもて来るもあり。人ひとりゞ、いくつを着るべきにゝあらんと見る人々あざみたり。やう〳〵日さゝいづれい、わざとならずをゝしきさまふて、くひものども里よりもてきてくふもあり。それに目を見やらず、扇をつらぬき、たきものをたくもあり。つぼねの人々あないみゞ、けあげさせ給ふな。この日ごろ物さゝゞしうれぼゝめゝて、物もきこしめさず。けさだになほ湯づけにても、たゞすこしきこゝめせ。そこらのはぞどもハ、いゝゞもたげさせたまはんずる。はを覧ぜずやをありし。昨日うへのはまべ研子





の、とりかさねて左衛門にきせさせ給ひて、ゐらんぜしほとに、左衛門のかみえうごかで、すくみてたちて侍りしハなどいふもきゝいれず。心ひとつをさきぎたちたり。かゝる程に、日やう〳〵辰の時ばかりになれバ、うへより、この人々、おそくまゐり給ふとある仰せごとさぶらひの人々、あるハ刀自すましなど、いち〳〵ふいひわたす。されどれいの事ぞとて、わゞみのことをかへも〳〵みがきゐたり。あまり日たかうなりぬと、仰せごとたびく〳〵になりぬれバ、叅りあつまる。れほやけ人、やゞて几帳さゝ、又いきてみちはらひなどして、まゐる程、きぬのもそなどとらせて叅るを見れバ、扇もえさしかくさず、きぬのこぢたくあつけれバ、たを

もまし　物洗ひも
ゝぎなどの業をする
下仕の女こいまま
しともいふ

やらなるけもなし。唐衣ハ、やゞてきつるまゝに、ほころびていでぬれバ、そぢなくて、このむとなけまど、むらごの糸してかけたる。かくてまゐりこみあつまる程を見るに、ゐまへのかた思ひやられ、れくゆかしげなり。扨まゐりこゝぬれバ、寢殿のみはしのまゝ、御几帳うるはしくたてさせ給ひて、その西の間より、わた殿より、又にしの對、東南れもてまで、ひとまにふたりつゞゐたり。みはしの東のかたより、東ざまにをれて、水のうへのわたどのまでゐたり。かずはたらずおしはゝるべし。みすハむらごの糸してあみたり。縁などの例のさまならず。心ことにめとまりてせさせ給へり。かやうにて、なみゐたる人の有様いはんかたなうれ

このむとなけれど
云々　おのゞ好み
ゐあらねど止むす
をえず糸して衣の
袋をとりかくしつ
くろふこ

どろ〳〵し。雪の時だにうりに、上達部參りあつまり給ふ。大かたの空ハ晴れたれど、雪うちゝりていみじうをらしう見えたるに、わたまへのすなご、えもいはずわたもしろきふ、やり水などの音もをゝしき程にながれたるに、どのばらなどのまゐり給ふ、さるべき御隨身ふどのいみじうつき〳〵しきさまして、中門のほどに弓枝つきてゐたる程など、たゞ繪にかきたるとも見ゆ。關白殿參らせ給ふさま、御隨身わどろ〳〵しうめでたしと見る程に、小野宮のわたとゞ（實資）のまゐり給ふを見れば、御年の程よりハわゝく見え給ひて、猶いとかほこまかに、あひぎやうづき給へるさまなり。人よりはことにふつかしう見え給ふ。大將かけ給へれハ、をの給ふ

小野宮のわたとゞ
實資ハ參議斉敏の子當時右大臣四年六十九なりき

もいとあざやゝにたたて給へり。かれまづ東のたいのもやに西むきふつきたまへり。殿上人は南のひさしにつきたり。母屋ハ南を上にして、ひさしハ西をかみにたたり。すどもとゝのほりぬる程まで、みな例のさほうにて、わたまへのかさに、西の對まてみわたし給ふに、さらまもいはず、きぬのつまかさなりて、うちいだしたるい、いろ〳〵のにしきをまくらさうしにつくりて、打おきたらんやうなり。かさなりたる程、一尺餘ばゝり見えたり。あさましうわどろ〳〵しう、袖口ハまろゝいでたる程、火をけのさゝやゝならんをするたらむと見えたりよろづあさましうもはづかしうも、こゝらの人いろ〳〵見るらんと、すゞろはしうておもて赤

まくらさうし　恵心僧都の著に枕雙紙といへるあり其跋に書畫座右後置枕上とかきたりこれ物を手そぐ小置くを枕籍ふまといふゝふて名づけしこされバこゝの枕草子も座席ふ置くべきものなれの本ふ作れるよし也清少

納言の枕草子もこれと心ぞへ同じりるべし

み路ふべし。拜禮はて、左大臣にてこの関白殿たはしませバ、それをさきとして、いとうるはしう、のどゝにあゆみて、寢殿の東面をもてのみはしよりのぼり給ひて、南の階の東面を一の座にて、関白殿つぎに小野宮の右のれとゞつき給ひぬ。つぎに中宮大夫（齊信）などさしつゞきふみゐさせ給ひぬ。みな御志とねにゐ給ひて、北むきにゐさせ給へれバ、口下がさねの志りどもハ、高欄にうちかけつゝ、ゐさせたまへり。かいねりがさね、袿揚えびぞめ、わかうたはする殿ばらハ、紅梅などにても着給へり。色々ふ見えかゞやき、照りわたりたる程、いみじうをゝし。たはしましゐて、此みすぎはをたれも口覽じわたせバ、この女房のなりどもハ、袿

さくら、やまぶき、こうばい、もえぎのいつ色をとりかはしつゝ、ひとりに三いろづゝをきせさせたまへるなりけり。ひとりハ、一色をいつゝ、みいろきたるハ十五つゝ、あるハ六つゝ七つゝ多くきたるハ十八、廿にてぞ有ける。この色々を著かはしつゝ、なみゐたる也けり。あるハ、唐綾をきたるもあり。あるハ織物かたもんうきもんなど色々にたたゞひつゝぞきためる。うはぎハ、いつへなどにたたり。あるハ柳などのひとへハ、みなうちたるもあめり。から衣どもの色、みなまたこのれふじ色どもをとりかはしつゝきたり。裳ハみなれほうみなり。口口帳ども、紅梅もえぎ桜などのすそごとて、みな忘がきたり。ひもどもあをくてかゞや

けり。此ひとへハ皆あを綾なりけり。殿ばらあさましう、めもあやにて、かたみにハ目をみかはしてあきれたまへり。けふも四條大納言（公任）内のおとゞ（敦通）まゐらせ給はず。故うへ（公任女）の御忌月なりけるをバ、内のおとゞハ、むげにまゐらざらんハいとぼつゝなくゆかしくとて、御直衣ふて、うちふ奉らせ給ひて、女房の中にまじらせ給ひくきぬの袖口つくろはせ給ふ。髪かきなでなどせ給ふ。女房なゝめいとわびしう、身よりあせあゆなどハ、これをやいふらんと、わびしうたぼえて、れもて赤む心ちもれども、身ハひえたりけり。れほゝたのありさまハ、れまへの御覽ずるをはづかしう、いかにくと、人のかたちふるまひよりはじめ、きぬの有様にほひなどを、

御覽ずと、わびしく、おのくれもひつゝ、このなみゐて見給ふらんめどもハ、さばれ誰ともおらを奉らぬバ、御霊會のほそををとこの、てのごひしてて顔らくしたるこゝちするに、この内のれとゞのほゝゑみまぎれさせ給ふぞ、いみじうわびしきなりける。この殿ばらのかをり白ひさまぐめでたくふきいるゝに、またうちにハ樒花をえもいはずたきいで給ふ。けふの侍從ハ、左右大臣にも勝りぬべくなん、人々れぼされける。れまへよ東のらうのまへのかたよ、やゝ西にいでゝ、樂人どもゝ候ふれまへの火たきやのもとの樒の、人ちげきけはひの風よ、ちりくるかをりもめでたし。れいのさほうの樂人、四人づゝいできて、萬歲樂太平樂

御霊會のかえり男祇園の御霊會のまたりものゝ中ふかゝるものあるなるべし紙くハ去られぞ

樒ぞをえもいはぞ云ゝ　樒花ハ香の名なり下の侍從も同じさて大臣ふも

まさりぬべくといへるハ薫物をほめて戯れいへるこ

萬歲樂　拾芥抄音樂部ニ平調黍系ホ

とあり隋の煬帝大永今白明達をして作らしむと云ひ傳ふ

太平乐　一名武將破陣樂と号し鴻門曲とも称す楚の項莊項伯の両名鴻門の會の時劒舞せし状を摸せるとい ふ

なゞまふほど、いゝゞうれもしろし。がくの音などもけからよやすぐれてめでたう聞えたり。樂人ども、たまへのかたのみもぎいをうちまほりあくる心ちも興ありて、物のねいとれもしろし。ふ野宮のわとゞ、関白どのにさゝゝりきこえ給ひて、れもしろきすゞも、めでたき事いまも年へぬる人ハ、おのづから見るものなり。いざけふの、女房のなりのやうなるすこそ、まだ見はべらぬ。たゞかゝるすハ、あさましうけしからずぞなりける。など申給へバ、閑白殿うちほゝゑませ給ふほども、みすの内にハ、何すふらんとすゞろはしう思ふべし。一日の関白どのゝ大饗をぞ、殿の有様よりはじめ、えもいはずめでたしと思ひしに、かきいや

はしらまつ云々　このすゝ柴ふいへり

みの夜なりけり。けふハあきらゝなる鏡ふきしむゝひたる心ちしてこそは、わゞはづかしけきバ、さやうにこそハれほえ侍き。をとこ所のハ女房どほにて、いと心やすしかゝ。まづけふハ、よろづのすのあまりいたうつくろはるゝに、いとわびゝやなどの給ふも、いとさまぐをかし。まことやべん（順時女）のめのとのめいこそハ、けふやゞてれとなにさせ給へバ、とのばらなどまゐりあつまり給ぬれバ、まづ中宮太夫殿ハ大盤どころのかたよりいらせ給て、ものこしゆはせ給けり。ロかはらけ共たびくになりて、殿原のロ物はぢもすこしたゝのびかたげかり。日のくるゝ程に所々のはしらわどもに、またてごとにともしたるひうりぐも

などもひると見ゆるに、また女官どものたちうかほふ、あやしのなりどもそばめたてゝ、物つゝましげも思ひたらぬけ〳〵きふて、御となぶらてごとにまゐりわたすほどなどもざるかたにをらしうわろ所などふかゝる物いできなんやとみゆるに、衛士のなにぞやをかりぎぬのまねにしてきてなでうすゝ侍めるとも思たるけ〳〵きして、いりゐて心ようたきゐたる程、みじうけだかうめとまりてゐらんず。殿ばら今ハゐあそびになりて、いみじうをらしきふ、夜にいりたり。ものゝねども心ことなり。ゐかはらけよ、花ゝ雪かのちりいりたるふ、中宮太夫うち涌し給ふ。梅花帯雪飛琴上、柳色和煙入酒中。又たれぞの御こゑにて、ゐかはらけの方げゝれば、一盞寒燈雲外、夜数盃温酎雪中春などゐこゑどもをらしうて、の給ふに、おにゝけふハ、万歳千秋をぞいふべきなどゝ給ふもあり。さまぐをらしくみだれ給ふ。やゝたへがたげにゐけ〳〵きども見ゆるもたはすべければ、心ぐるしうて、ゐ禄どもとりいでさせたまふ。くらければ見えねど、いとどうせさせ給へりとぞ、きゝ侍し。殿ばらいでのゝちらせたまふ。さて閑白どの内にいらせ給ひて、ゐまへに申させ給ふ。けふはれる、もべていとことのほかに、けしうらぜさせ給へり。このとしごろ世の中いとかういみじうなりにて侍る、又一とせのゐ堂の會のゐかたくれ女房のなりどもおどぞ、世よめづらうなるゆども

梅花帯雪云々 和漢朗詠集上に載せたる章孝標の清句なり

一盞寒燈云々 これも同集下にあり 白居易の句なり

ふ侍りしゝど、それハ夏なれバ、ことかぎりありて、すぢなかりけり。なでふ人のきぬゝ、せきたるやうさぶらふ。さらゝゝいとけしゝらずれはします。小野宮の実資れとゞ、中宮太夫斉信ゝど、いとはづゝしき上達部なり。すべてかゝるゑをなんきゝ見ざりつるとぞ申されつる。それハさるものゝふて、みめのわどろ〳〵しう、きらゝゝのなるゑハ、また世よめづらかゝ候ひつるわざかなと、かへもゞくれたゞことをせさせ給ふ程のロけはひ、けぢかうあいぎやうづきはづかしゝうれたしまも。けふの一れかをともれぼえさせ給はずなん。いま御堂にけふのことゞも問はせたまはゞ、此女房のきぬのかずにより、御勘當侍らんずらんと思ひ給ふるこそ、いとくるしうさぶらへ。宮々によき事候へバ、うちゑませ給ひていとよしと覚しめしたり。かやうのれいならぬ事候へバ、まづおひたてさせ給ふに、いときやうゞにさぶらふなり。大宮上東中宮威子ハ、女房のなり、むつにすぐさせ給はねバいとよし。此れまへなむ、いとうたてれたしますとこそハ、つねに候めれふど申しおかせ給ひて、いでさせ給ふ。女房達ゐすくみて、たつこゝちいとわびしゝれのゝくさるべきにハ、陣に車ゐてさゝぎ、さらぬハ、つぼねゝに皆いきて、物もれぼえでゝりふしゝぬかくてその夜もふけぬれバ、又の日御堂より閑白殿とく參らせ給へとあれバ、なにゑふかとて、いそぎ參らせたまへれバ、世間のロものゝ語なりけり。

きやうぐ軽々しきことなり

同召けふあすになりぬれバ、さやうのるどもなるべし。かうて、いゝにぞやゝきのふの宮の大饗いゝバありしと問ひきこえさせたまへバ、侍りしやう、ちゝぐゝといちゝに申させ給へバ、いと心よう宮ちゐまさせ給ひて、さて〳〵と問ひ聞えさせ給ひて、女房のなりなど問ひかたらせ給ひて、ありしるどもを聞えさせ給へバ、いみゞうはらだゝせ給ひて、あさましう、めづらしのふるるどもなりやゝきぬいなゝつやつをだに、やすからぬことゝ思へバ、中宮大宮などにハ皆申しちらせて、いみゞき折ふしにも、たゞ六とさだめ申したるをあやまたせ給はぬに、此妍子みやこそ、ことやぶりにれはしませ。すべて〳〵さらに〳〵うけ給はらじと、すぎにたる事をのゝちらせ給ふも、さまをゞにをゝしくれぼさる。さるにても、れとゞいかうやいいますがるべき。れぼやけの御うしろゝハ、いゝなる人のするわざぞ、なでふさることを見てたゞにある人ゝあるなど、いとれどろ〳〵しうむづからせ給ふ。いとわりなき勘當なりとぞ申給ふ。かへもぐめづらゝなりし日の有様とぞ、東宮中宮太夫殿たちなどまゐらせ給ひても申させ給ふ。

㊱ みぬの月

かくて皇后宮の四なやみ、こぞよりハたのゝすくなくなるらせ給へバ、所をかへて試みさせ給ふべく人人申せバ、さてとて、大藏卿の四家へわたらせ給ひぬ。

皇后宮 娍子

大藏卿 通任

峯の月　此巻をかく名つけしハ三條院の皇后かくれ給へるの法ずの願文ハ獨嶺月之曉色云くとかけるによりてこゝ巻しくハ後ハ見ゆ一本ニ望月

とあるハ紀なり
大納言の北家　通任ハ済時左大将の男姫子皇后の兄なり

扨おはしまし―たるとゝ、同じことにのみおはしまず院（小一条）より はゝどめ、宮々（敦儀 敦平）もいみじき御祈はじめさせ給へど、おなしーやうにのゝおはしーまして、かぎりくとのゝ見えさせ給ふに宮の宣給はするハ、はやわもれてやみぬべくりつるものを、この姫宮（礼子）のゝありさま見はてぐハえゆきやらぬ事となげかせ給ふ。御前にさぶらふ人ゝ、宮くのゝ涙とゞめがたきに、ひめ宮（礼子）のまいてせきあへさせ給はぬほど、あはれにいみじく見えさせ給ふ。院いとかくなおぼしめしそ。世の中に侍らんのぎり、誰をたれと思侍るべき身ふらぬこそ。などきこえさせ給ひて、ゝなうしの袖もいと所せげにおはしませバ、宮のゝまへ、さこそたのもしく思ひきこえさすれど、猶心ぐるしうなん。さばれ今ハかくも思ひ聞えさせじ。罪いとゞからんなどいとよとげなるゝけしきに、萬いと哀にかなしう、心ぼそく覚えさせ給ふべし。四宮かくておはしませバ、仁和寺宿正いとうしろめたく思聞えさせ給ひて、夜ひるわろぬゝ使あり。何ともすべてのことるゝなけれど、遂に三月つごもりに、花ゝとゞもゝ別れさせ給ひぬ。いゝじう然しとハきこえさするもおろかあり。宮の内の有様おもひやるべし。むげにおとなにおはします院（小一条）などだに、いゝどうおぼーめす。まして姫宮（礼子）ハ、おぼーめし入りたることゝりに見えさせ給ふ。ゝ年あども只今ハいとかくおはしますべきにもあらざりつるに、あさましく

四宮　師明親王なり後ハ出家右兵衛督にて仁和寺僧正阿闍梨信の弟子となれり河信を右大臣雅信の男なり
三月つごもり萬寿二年三月廿五日崩じ給へるゝ紀長谷雄略紀ともおもおもじ

くちをしう心うくのみたれもおぼしまどはせ給ふ。
ひめのとれ式部れせんど、八十ばかりにて、ふるづに
あはれなるものに覚しめしたぐいませ給ひつるに、
おくれたてまつりたる程いへばおろかなるいとしき
み、何ともなくて、たゞ消えにきえいりて、物もおぼえ
ねば、むすこの衛門の大夫むねかたゞ来て、ふるづよ
なぐさめ、湯のませなどすれど、かへしつゝまどふ。こ
とゝりにいとじくなん。月たゝば、祭などいひてむづ
らしかるべければ、いかふなどたばしめして、ついた
ち三四日の程に、そうりう院は、西の院といふ所に、れ
はしまさせ給ふ。やゞてその夜にくはんといふ所せ
させ給ふに、こと人まゐりよるべきにあらず。宮々入

そうるうゐん　寺院の名なるべし所在文字ども詳ならず按ずるにそれ程ふるごとつゞくテニハ有て下を雲林院ふるべきかとも思へど下文ともそうるうゐんとあれバ定めがたし

にくるん　入棺といふ詞を約め云へるなり

入道のきみ　清時の四男相任なり

ひるのとこ　和名抄車部に輦車和也車の屋古一云車輿とあり

よのつねのさま云々　通例の火葬ハ志たよふまじき中の四位言となり

道のきみ、大蔵卿などつかうまつり給ふ。哀にめでた
し。入道のきみは身にたふとき子共かきあつめさせ
給ふ。これい院もひめみやも京ハ牛車にてつかうま
つらせ給ふ。故院（三条）の四時こゝろよせつかうまつりし
人ゝ、又今の院（小条）の殿上人など、いとあまたつかうまつ
きり。いとれどろ〳〵しき御よそひなり。さて西院よぞ
たはしまさせて、御車のとこかきれろして、たハしま
させ給ふ。四月十四日にをさめたてまつらせ給ふに、
御ゆいごんよりやよのつねのさまにて、たはしまさせ
給まゞきなめり。みな西院にぞ式部（敦儀）卿宮などもたを
します。姫宮もとまらせ給ふべきにもあらねば、志の
びてわたしたてまつらせ給ふ。院もやがてかくてた

はしまゝ。西院にハその日ふなりぬれバ、さるべき御有様、日ひとひいそぐせ給ふ。西院のいぬゐの方についぢつきこめて、ひもだぶきの屋いとをかしげに造らせ給ひて、そこゝをさめたてまつらせ給ふべきなりけり。院などの、一夜もこゝひもあゆませ給ふぞ、おろゝならず見えさせ給ふ。御念佛の僧など、数しらずれほゝる中にも、四宮の御方ゝゝ、奈良仁和寺などゝりまゐりこむ。あはれなる御けはひも遠からぬ程を、齋院に御みゝとまりて、どこに御とのごもらず、ゝろづ覺し志らせ給ふ。そのわたりゝ、れほゝくの人ゝちたりさてその屋ゝ、四方つらひをいゝじくせさせ給ひて、やがて四車ながらかきすゑて、れはしまさせ給ふ。

雲けぶり云く 火葬ゝゝゝゝんゝハ全かゝとなくて断念もべきをとなり

四とならぶらあゝくかゝげて、きこしめし物などまゐりすゑたり。萬かくと、今ハ見たてまつらせ給ひて、ゝやゝ院などゝ、ゝろづをの給ハせつゝ、なゝせ給ふさまなど、いとゝいゝじういふにもおろかなり。さて人ゝ夜あけぬべしなど申せバ、いぎさせ給ひて、おもしますやのつま戸、うちゝたむる程、さしのきたる人々のこちだゝ、いとゝいゝじうあはれゝかなしきに、まいてことゝりにいゝじう見えさせ給ふ。雲けぶりとならせたまはんハ、あさましなどながらも、いふかたなくてやませ給ふを、これハ哀ゝいもんかたなし。女房たちなど、こたゝぎりこそ四ともゝまゐらめと、皆志ゝひきこえさせて、まゐりつれど、いとをるゝゝ見やりま

ゐらせて、のきてなん車どもひきたてゝるゝ、たもし
ます屋の戸とづる音ゝ、あるゝぎりこゑをあゝせて、
いひもらぬおとなひどもなり。月いとあゝくて、ほと
もの法師俗そこらの人〻かぎりあれば、何ゝも思ひ
たえていそぎかへるありさま、祭のゝへさなどの心
ちして、物さゝゞしく見ゆ。やゞてその夜三條院ゝ歸
らせ給ひて、西の廊、わゝ殿などのいたじきたゝして、
院宮々、たゝしますべきかたく分ちられば皆入らせ
給ひぬ。ゆゝしげなる御たつらひの有様なり。姫宮（私子）ハ
あるゝなきかのほけしきにて、あゝさせ給ふ。又の日
の二日ばゝりありて、宮ゝ内侍、令婦などゝ人のもとゝ、
いとなるこゝちしてかへりけんなどとひたるほ返

板じきたゝして云々　喪中ハ床の板敷を下げて土と均しゝする他法なり

むのゝとのの　たまハ霊なりゝどのハ夜殿の意ゝて寝所のすなるとこゝゝてハ此殯宮をいふ

かゝしゝ　古今集靴上ゝ　石の上ふるの社のかゝしゝももとの心ハたられぬくゝ」とうれば相任ハ奈良ゝ住せしか又按ずるゝかゝしゝたハかうしゝとゝりしを漢寫せしゝや

事ゝ、

思ひやれむねやたあくる音たゝゝ、たまのゝどの
ゝ戸をとぢしゝり」とぞいひやりける。雲霞とならせ
給ふもげゝいゝどきすなれど、これハさまかちりて、
いゝじきことのさまなりぴめゝやハ、月日のすぐる
まゝゝ、あるかなきゝにおぼしめされて、すぐさせ給
ふに、人〻女房のなゝゝいゝでかハおのづゝら程ふ
れバをかしきすもあり。このすけ（相任）とゝ本かゝしはの所
より、中納言の君に、

けぶりせぬゝやまれろしのかなしさに、雲のゝや
しハたちやそひけん」とあれバ、
ありとてや人ハとふらん。たくりおきゝたまのゝ

どのようそひにしものを」とぞありける。ことゝりゝぞありける。さて後々も、宮々西院にたもゝます。七日七日のほうども、さまぐいとしくせさせ給ふ。ほ念佛もてまでであるべく、この西院の僧たちに、たゞせる給ハも。是ハこのたはしますめぐりゝい参入つゝ、つかうまつるべきなり。ほ法ほの御經ハ、院のほをづゝらかゝせ給ふ。ほ佛ハ、式部卿敦儀の宮、それハおのづからたゞしおきてさせ給ふほもあるべし。帥中納言隆家左衛門督兼隆のほ方ゝて、皆けからひ給へり。かくてほ法ほ又の月の十ゝ日にせさせ給ふ。中宮威子ハ、七僧のゝうふく、うるたしくせさせ給へり。三條の宮ゝてせさせ給ふ。其ゝどのほありさま思ひやるべし。御願文、大内記菅原の

左衛門督　栗田を兼の二男母ハ遠江安なり

けからひ　はからひの誤ならむと云もそれど猶本々くの如し

ほ願文　續本朝文粹ゝ載せたりゝく

金車長輟玉扃空閉以来供奉何物獨領月之曉色繁巡往人唯林禽之暮聲云々是の名この向ふ掛まうしと云々

わまつかの曉のゝげ　誤脱もやあるらむ聞えがゝし

思ひぞつかうまつりたりける。このたハします御ありさまをつゝうまつりたるが、いゝとしくあはれなりけり。たゞかたはしをまねびたる。こかねのくるまゝらへよせて、玉のとばそをとぢてふりこのかた、供養するやなにぞの人、われつかの曉のかけするや誰の人ぞ。たゞはやしの音のゆふべのこゑなどいゝとしく哀なり。かくてほ通經などさまぐにてはてぬ。この御願文をある人きゝて讀ゝける。誰と云らず。

月のかげはやしの音れこゑならで、ゆきかふ人のなきぞかなしき。

此頃きけバ、會坂のあなゝに、関寺といふ所に、半佛あらはれ給ひゝくゝ、ろづの人まゐり見たてまつる。年頃

関寺といふ所ゝ半佛あらはれ云々　古事談ゝ万寿二年五月比関寺有引材

木之牛、此時大津住人等、多見迦葉佛化身之由、此事披露之間、貴賤上下、參西岳、彼牛、礼拜、此牛云々、とかくりそのほかゝる風説ありしからふ、此物語ふも、書き記せるならん

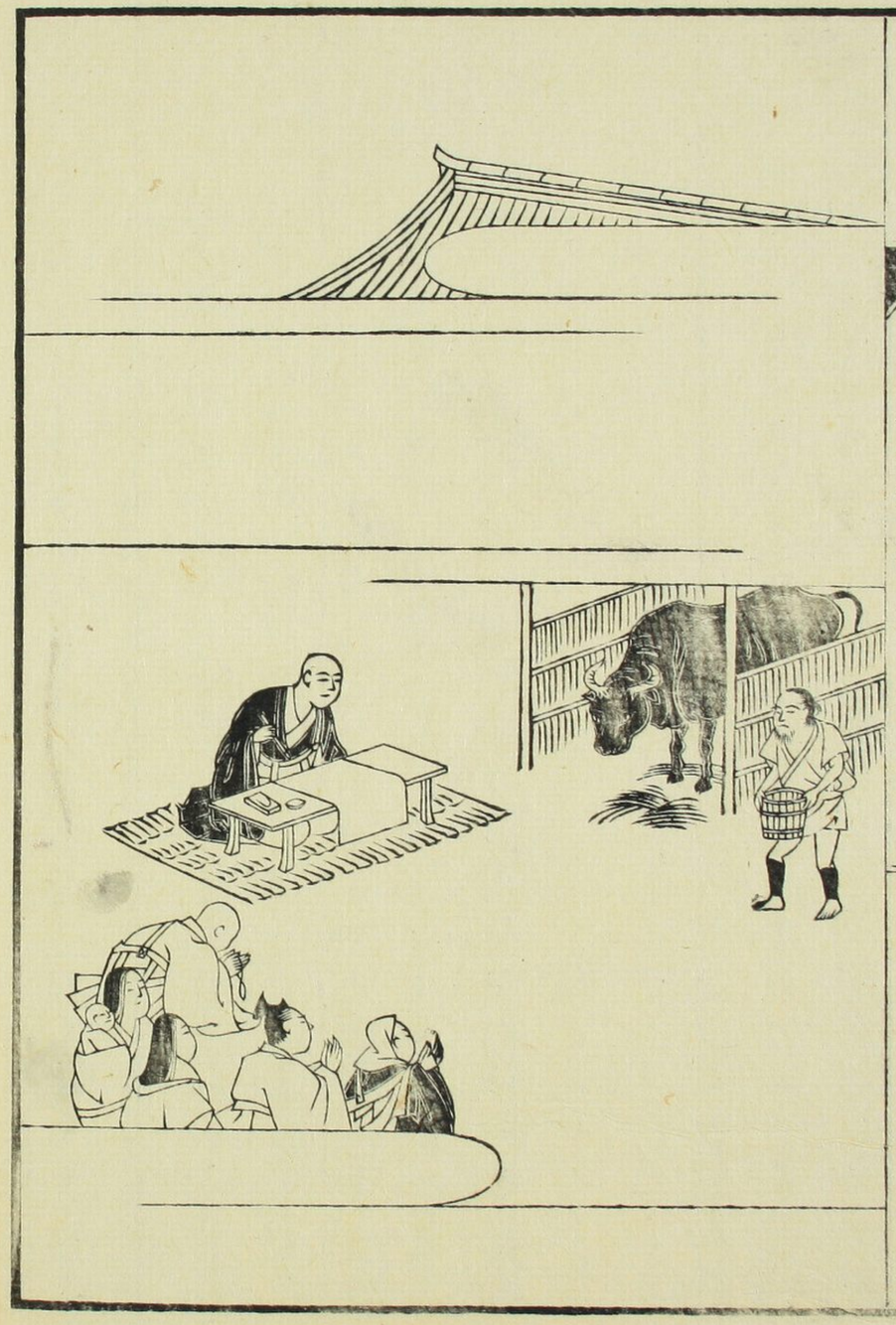
かせう佛　迦葉佛とかくなり、上巻ふもゝ云つり

この寺に、れほきなる瓜堂たてゝ、彌勒をつくりすゑたてまつりけるくれ、えもいはぬ大木どもを、たゞ此牛一つして運びあぐるすを、ちけり。あはれなる牛とのみ、此寺のひじり思ひゐたりける程に、寺あたりにすむ人、借りて、あすつかはんとて置きたりける夜の夢に、我いかせう佛なり。此寺の佛をつくり、堂を建てさせんとて、年ごろするにこそあれ。たゞ人ハいかでかつかふべきと見たりけれバ、起きてかうく、を見つるといひく、をゞさゝぐ也けり。牛も黒くて、さやかにをかしげにぞありける。つながねど、行き去るすもなく、例の牛の心ざまにも似ざりけり。入道殿をばしめたてまつりて、世の中にれはしける人まゐらぬなく、參りこゝ、よろづの物をぞたてまつりける。たゞ、みかど、春宮、宮々ぞえれいしまさゞりける。この牛ぼとけ、なにとなく心ちなやましげにれはしけれバ、とくうせ給ふべきとて、かく人まゐりこゝて、此ひじりハ御えいざうをかゝむとて、いそぎけり。かゝる程ふ、西の京に、いと尊くれこなふひじりの夢に見えたる、迦葉如来當入涅槃諸佛薩埵當得結縁とぞ、えたりけ、ばいとゞ人々まゐりこむほどに、弥ふむもあり。いづゝ、

えいざう　影像ふり

六月二日云々　古多淡前文のつゞき

きゝしふり牛ふ心をかけ、ぶらまゞこそ越え祢あふさゝの關、人々あまゝきこゆをど、れなじふなれバかゝず。日ごろこの寺かたこのゝせく、六月二日ぞ此



ふ而件牛、西日有病氣六月二日太重入滅之期可近欲然間件牛出自牛屋漸歩登御堂巽面廻御堂二匝、道俗涕泣其後仏前寺僧等念仏、又更起相扶廻一匝也帰水所仏云々不経幾程入滅云々実可謂化身欲と見えたり

あらもらさ　扶桑略記万寿二年の条ふ自夏及秋季有赤疱瘡と見ゆ紀略もおゞ同し

まなこ入れむとしける程に、その日ふなりて、この御堂を此牛見めぐりありきて、もとの所にかへりきて、やゞて死にけり。これあはれふめでたきことなりかし。而像に眼いれける形ぞはて給ひにけるひじりいこじくなきて、やがてそこに埋こて、念仏して、七日七日に経仏供養しけり。後にこのかきしるかたを、内にも宮ふもをゞませ給ひける、かゝるゆこそありけき。まことのかせう仏このたなじ目ぞかくれ給ひける。いまハ此寺の彌勒供養せられ給ふ。

かくいふ程に、今年ハあかもがさといふ物いできて、上中下わうず病このゝちるに、はゞめの度病まぬ人の、此度やむなりけり。内東宮（後一条後朱雀）も、中宮（威子）も、かむ（嬉子）のとのな

さはくしますべき云〻 ゐ産の期は

ど、皆やませ給ふべきゐるなりどもにてわばしませバ、いとれそろしう、いゝにくとたぼしめさる。よろづゝりも、かん(嬉子)の殿、このあかもがさ出させ給ひていと苦しうたぼしめしたりとて、殿ゐのゝたちて、いゝじく覚しあとてさせ給ふ。今年ハかうたゞならぬ人、月たらすなどして、皆ことゞもあやまるなれバいゝゐくたはしまさんと、たぼしなげかせ給ふもことゝりなりゼ月ゼよ日のゐなれバ、例も此頃ハ、すまひにていとわりなきなつさなるに、折しもかくやませ給ふ。よにいゝじきことにたぼされたり。東宮(後朱雀後一條)うちゐハ、唯けしきばかりにて、たこたらせ給ひにけり。このゝん(嬉子)のとのハ、この月などゐこそはさはしますべきに、いとくたそろしきゐゐなりと、なげかせ給ふに、ゐもがさいとたぼくいでさせ給ひくたひらゝにたはしませど、日ごろ苦しうたぼされて、いとたへゞたげなる御けしきになりつれど、つごもりふハ、たこたらせ給ひぬれバ、よにうれしきことゐ覚しゐろこびたりされどまだ程もなけゝバ、御湯などもなし。さきぐゐものゝけのけしきぞたはしますを、いとゞたそろしきゐにたぼしめさる。院(小一条)ハ、女御(延子)のゐなやゝのをり。堀河のた(顕光)とゞの、かんのとのゝゐうぶやに、かならずまゐりて見奉らむとありしを、人去れゼ常ゐたそろしうたぼしいでさせ給ふ。中納言(長家)殿の北の方も月ごろたゞゐもたはせざりけゝバ、折あしきかさを、いゝ

月ゐ臨むゐゝ

女ゐのゐなやみ 延子ハかつて小一条院のつれなきを憤りて失せ給ひその父顕光も院を恨みたる事上表ふありきされバ小一条院のゐ子延子の時ハ必祭りをなき由を申したりとあり

にくと大納言(斉信)殿も覓しなげき、中納言も、いかにとれぼ〜つるに、月頃いとじうほそりやせ、ありし人にもあらぬはありさまをぞ、いかにとたそろしくてさまざまの御祈をたつくさせ給ふめる。かむのとのゝはらさかれさせ給ひつれど、御ものゝけのけしきの、いとたそろしくて、まだは湯もなし。かゝる程ふ月もたちぬ。この月にハかならずたはしますべけれバ、今やくとまちたぼ〜めさるゝ程に、二日の夕つかたより、いとかやましうたぼしめ〜たれバ、御修法は猶強かたうされはいのり後こゝろをあはせて聲もを〜まぢる祈うし奉る程の、ゆすりあひか〜ぶまし。とのゝはまへ、まだ〜きにいとい、たうなのゝしりそ。まことの

折にこそいとの給する物から、我は心ちも、いとあとたゞしげにたはします。たゞきは奥とも近くとりよせ、女房たち、白き装束ども、さとなるハとりよせなどして、よろづそのほどの用意いとかぎりなし。東宮(後朱雀)にもきこ〜めして、は使どもひまなし。されどその夜すぐさせ給ひつ。又の日までなやませ給ふ。はものゝけども、かずたらずいできて、のゝたりさわぐ。おのゝかりうつ〜て、僧どもあづかり〜に、加持〜のゝしをど、か〜がましくのゝしりて、つれなくたはします。東宮(頼宗)やの大夫(能信)たち、かぎりなくたぼつゝなくたぼせどえまるらせたまはぬほど、心もとなくいとうたぼされける。堀河のたし(顕光)と〻女(延子)御さ〜つゞきてのゝ志

り給ふさま、いとうたてれそろしう、あやにくなり。世の人、家れ内にのこりたらんやまごらひせざらん人こそハ、女などハのこらめと見ゆるまで、いとゝいとゝじう、國々のかゝなどまで參りあつまりたり。大宮もこなゝふわたらせ給ひて、れなじ心に見奉らせ給ふほどなど、えもいはずめでたきなゝらひ也。年頃の人々、いづかたにもむつまじうたぼしめすかぎり、近くさぶらひあつかひきこえさす。春宮より御つゝひ隙なし。日頃ハなやませ給ひつれハ、れそろしうて、よろづれ心調度どもとりいでゝ、心經にはこびいでさせ給ふほどげふいゝじからんいたゝら物、何にすべきぞとことわりふ見えさせ給ふぐらの令婦いづ

物の上手ふ云々
白塵の折の令抱を上手ふ云せしなう

き、この白まへたちの御折も、まづ物の上手につゝうまつるに、まいてこたゝハ、小式部の君わゝき人なれバうしろめたし。我こそハ其ゝはりもとりかさねつゝうまつらめと、萬いそぎつかうまつる。今やくとれぼしいそぐに、心よりほゝのゑハ、かやうのことにこそあめれ。かへもぐも心もとなく覚しめす。院（小一条）ゑハ此ゑどもきこしめして、堀河のれとゞ、女白やなどさしつゞき、いとれそろしきけはひにれはすらんを、このへもぐかたはらいたく苦しうたぼしやらせ給ふ。此わたりにハ、さやうにれはしまさんことわり也。此白折かゝれバ、殿いかふ我をも心づきなくたぼすらんとれぼしめすも、たゞなるよりハ、むづゝしう覚しめさるゝ

ふも、こゝろくならず。このひめ宮、若こゝやなどを思ふに
こそ、かく苦しけもなどぞたぼしめされける。はゝな
くすぐる月日につけても、物のこゝ哀にたぼしつゞけ
らる。萬ゝりも、此御ことの心もとなきを、唯今ハ世の
中にゆすりたり。ひはらへのおとなどれ、かしがましし
さいこゝどうてづゆことの聞えやらずなりあひてこ
そ、のゝ志らせ給めりしりとぞ。

其六 楚王れ爰

嬉子
かんのとのふいこゝじきひ調度どもを、志誦経にと、の
こりなくとりはらひいでさせ給ふ。世の中の人、殘り
あらじとみゆるまで、そこら廣き殿の内ひまもなし。
ひのおいみじとたぼす程に、さるれ時ばゝりに、御子生

楚王の爰　後朱雀院東宮ゑおさせし頃尚侍嬉子参り給ひけるゞ男ひこ子を生まきりて失せ給ひけるバ東宮ハかの楚王の爰おぼし合けるとあるゑよりてかく名つけたり楚王の爰の故ゑ

れさせ給へる、おなうれしいこゝじと覚して、又後のひ
ゑをいゝにとたぼせど、まづなにぞと内にもとまも、
ゆゝしうたぼす程に、男みこにぞたはしましける。其
程、殿道長のひけしきよりはじめ、そこらのうちの人、思ひ
たるありさま、たゞわゞ身ひとつのよろこびに思ひ
ちの人、どもかくもれたぼし思はんことゝりいこゝじ。こ
れい何れ物のかずにもあらぬおやしのちづのをさ
へ、忍こゝまけ、うれしげよ思ひたるさまいへバれろゝ
ふ、今ひとつのひことにより、いまひとゞよこゝのゝ志
りたる程に、ほどもなくたひらかにせさせ給へれバ、
かきふせたてまつる程、いこゝじうめでたし。大宮上東のひ

男ひこ子　志津ハ親仁後冷泉天皇ゑ申志ゝえ此ひこゝくふり野府記万寿二年八月二日壬子条云申時許左兵衛尉成元馳来云尚侍産男児云〻

八下ゑ安し

まへ、我ゞの時内春宮のの折ハ、なにともれぼされざりしゝど、世のひゞきこそ、かやうにいゝじかりしを、我ハともかくも、れぼえざりしに、このの御ことをの覚ずるかひありて、いとあはれにめでたうれぼされて、今ハあなゝに、心やもくわたり侍りなんとて、寝殿にかへらせ給ふ程など、いゝじうめでたしやゝさて御うぶやしなひハ、三日の夜ハ開白殿せさせ給ふべし。五日の夜ハ入道どの、七日の夜ハ大宮せさせ給ふゝなのさだめなり。開白殿かねてのの御よういありつるゞなれど、又にはゝなるさまにれぼしめされて、いそぎ出させ給ひて、いゝじきゞもおきての給はす。色紙などかねてすゝせ給へれバ、さやうのゞハ、心のどゝ

なゝり。こもち（嬉子）のの御まへの物などハ、皆あべいさまふ志おゝせ給ひて、たゞ物もるばかりのほどにあれども、ふぼ心あわたゞしうて、手をあかたせ給ふ。女房の志ろきさうぞくども、志ろき衣ひとかさ袙に、織物うすの物などをうえぎにて、裳からぎぬえもいはぬさまゞの物して、さきゞかゝるゞもハふりにしかども、いま見ゆる打ゝハ、めづらしゝうあざやゝに見ゆる。れいのゞゞぞゝし。ゝんれ（嬉子）とのハさらなりや。大宮（上東）のの御方の女房さへ、くもりなう志わたされたるぞ、いゝしき見物ありける。わかゝやの、又の日れのゆ殿の有様、いゝじうめでたきに、殿のの御まへ、よをつゝましげに覚しめして、の屏風のかゝゝより、さゝのぞかせ給へれバ、わ

口袖几帳　袖ふて顔をかくまゝあり几帳ハ屏をかくまゝ料の具なれハおい ふなり

そゝぐり　かけろふの目記ふ天の下の木をを取あつめて玲らゝなる巣ゑ ぜんなどいひて そゝぐりゐたる程ゑ云々と見え源氏紅葉賀ゑひゝなを造りてそゝぎゐ給へりゐどゑそゝれ

このき人々、うちまきをあやにくふまれバ、御袖几帳のほゞも、をゝしくみえさせ給ふに、こもち（碁子）のゐまへ、このゐゆどのをゆかしうれぼしめして、いはけなく立出でさせ給ひて、見やりたてまつらせ給へバ、とのゝ（道長）ゐまへハ、あなたそろし、たふれさせ給ふなと、申させ給ふものから、あはれふうつくしう、見奉らせ給ふ程も、げにぞことゝりにめでたかりける。わゝ宮のゐゆどのはてゝ、ゐまへふそゝくり伏せたてまつりたるを、殿もろ心に見たてまつらせ給ふに、かんの殿かくてはべるをバ、いゝゞたぼすと聞えさせ給へバ、殿いとめでたゝとこそ見たてまつれと、きこえさせ給へバ、されどそれよなえたふまゞき心ちのし侍るゞい

バさゑがしくいそがもしきその間おり

それよふえたふまじきゑゝ　流布本ふゐそれふなえたふましきそあゑどゑ紙なりこゝの表ハ若宮のいつくしきみつけても得堪ふまじく長らへがさしとのさゝゐもる

とわりなきぞときこえさせ給へバ、あなゆゝし。かくなの給はせそと申させ給ふ。日頃あゝゞさふりして、打つゞきゐものゝけのゆゝしかりつれバ、いゝじうよわらせ給へるに、物もつゆきこしめさず、ゐ物のけ、そのこゝちれとなく、皆人たゆゝたり。かつハれそろしとたぼしめしながら、いとかばかりのゐすくせふきバ、誰れもたけう心やすくれぼされたり。日ごろゐゆどのもなゝりつれバ、あもぞゐゆ殿あるべけれバ、あすにとくなれかし。湯あゝて、さわやかにならんとの給はす。ゐまへにも、そこらの人いもねぞゝたゝにおきつゝ、そのことゝなけれどよろづに仕うまつりあゝす。閑自殿にハ、あすのことをいゝじくいそゞせ

給ふに、夜もあけぬれバ、殿の口前、よさりの口たつらひ、立ちさヽぎせさせ給ふ。口侍経口僧法れ僧どもなどゝ、こよひハすこしとほくのけさせ、たつらしせ給ふ。日ごろうづもれたりし池、やり水なども、昨日ゝなはらはれて、心ゆくさまなり。よろづたつらひいそぎせ給ふ。若ゝやの口ゆどのも、けふハとくなどそゝのかしたほせらるゝふ、たつの時ばりりふ、嬉子もちの口まへ、いたううちあくばせ給ひて、いと苦しげなる口けしきれはしますを、御前にさぶらふ人々、いゝにくゝと見たてまつりて、とのゝ口まへふ、かくなどきこえさすれバ、僧などものけたれバ、口ものゝけのするなめりとて、御どきやう、又さるべき僧ども皆まゐりて、も

うちあくむせ給上奉ふ注せり

ろ心にいとれどろくしくれいの物のけさまぐの人人めしいでゝ、あるハそばよりさけびのゝしり出で、僧たち皆あたりくに加持ゝ申バ、れいのゆすりあいたるさまもとよゝにたり。いたう日頃よゝらせたまへるに、口物のけのとりつきたてまつりふけれバ、すべて口けしきことのほりまて、物もはりぐたくの給はず。堀河のたゝとゞ、女延子口などの御霊、すべてゆゝしきすゞもをぞいひつゞけのゝしり給ふ。口帳のとに、御枕のそばのかたにて、心譽僧都權僧正などゝ、加持まゐらせ給ふ、御読経にも、ごゐよき僧どものかぎりハ、口まへちかくをぶらひて、ごゐもをしまず、又いだれの時にかとゝことわりにいゝじ口、口調度どものこるなう、

堀河のたゝとゞ云々
小右記八月八日条ふ人々云故堀河左府並院女御乃息所又河一家尤有怖畏云々種々所陳有道理と見えされバ当時世間ふかゝる風況ありしあらむ
心譽僧都　三井寺の心譽なり

御頭巾どもにはこび出させ給ひて、更にいとたへがたげなるはけしきにて、ひつゞの時ばかりになりぬ。雨さへいとうたてけれバ、萬鳴りあひたり。世の中にハ、かぎりふゆゝしうさへ申もなれバ、宮々のはつかひきりて、春宮よりをたひまもなけそどもはゝへりばかぐしくきこえさせ給はず。殿のは前、は悩の内にちごをするやうに、つとそひふし給ひて、なく〳〵抱えたてまつらせ給へり。おほゝさ淮れもく物れぼゆる人なし。かよはせ給ふはこゑも、やがてうせもてゆくやうなり。あかいゝじ。心うきわざかなとおぼしふぐら、よろづをつくさせ給ふ程よ、酉の時ばかりに、すべて唯、蚊のこゑぢうりよとらせ給ふよ、そこらゝちたるそう俗上下、ちるもちらぬも、願をたてぬかをつきのゝちる。えもいはぬものまで涙をながして觀音と申さぬかく、たゞひたひに手をあてゝ、たちる禮拜ちたてまつらぬなし。いまハかぢの聲も聞えず。は後經のこゑもきこえず。觀音とのゝ申しのゝしる。ひとりゞ一部を申だよいゝゞハちるしれはすなるにまてそこらの人の、れなゝじ心に一心に、祈んじたてまつるほどハ、きりともとこそは見えさせ給へ。されど、すべてかぎりになりはてさせ給ひぬ。は年十九、あないゝゝじ、あさまゝとたぼしめす。殿のは前ハ、やがてさしのいてあさまゝくてふさせ給ひぬ。

のゝる程ふ船岡の南の方ふ、火こそほのめきて、たゞ

永東記万寿二年八月五日甲寅条云及申刻尚侍殿怒卒去天下道俗奉者歎息云々及夜終雷甚雨卒去之由所疑萬端也或云天氣所為云云或云産後依不加労旧血上所為云々或云産日依加持邪威各所為云々絶産給未平損之間云云

小右記八月十五日条云今夜尚侍葬送禪閤内府相従歩行云々

このもとり云く船岡近きもとりふて葬儀を営むもとしなり

ならずあはれかるるすぞ見ゆる。人く見やりて、あはれ
見よやはや又かくもありけるハなどこやりさわぐ
ふ、ある者の申すハ、かんの殿よ、ふ左衛門とていこじ
ういうたきものに、とりわきれぼ〜たりしが、日頃か
れもわづらひてえ参らざりしよ、此うせさせ給ふ日
ぞまゐりて、見たてまつりてまかでにけるま〜に、同
じ目、やゞてうせにけるゞ、祈しもこそあれ。こよひし
も、このわ〜とり近うする也けり。人々哀なりけるうし
を、いひたもへるよ、女房車もたしかにとひきゝて、い
こじうあはれに見やる。たかきみじかきこよなきも
ありさまにこそ同じういふなるゝらねど、ことのさま
けぶりにてのぼる程ハ、見えわゝぬわざふなんあり

かくや姫云く かくや姫ハもと月の

ける。殿ばらなどのあはれがりの給するを、殿のはま
へにほのきこしめして、あはれとふなかりけること
にこそ有りけれ。物ふどをやるべかりけるものを、人
よりもあはれとれぼしたりしろバ、れふじ所にやま
るらんとれぼしめすもかなしうて、ふくゝは覧じけ
れバ、火のいとほのかにて、人などもれほくも見えず。
ありさまのあはきに心すごげなる、かへすぐもあは
れがらせ給ひて、法事にだふかなられ物つゝはさん
と、おぼしめしける。女房車かへもぐあはれふ見やる。
こよひの月ハめでたき物と、いひおきたれど、まこと
ふあゝきハ、いとありがたうのこゝありけるに、こよひ
の月ぞ、誠にかぐや姫の空にのぼりけん、その夜の月、

和の人ゐてかりふ此國の人となりけるゞ月の明き夜空にのぼりける由竹取物語ふえて推も知るところあり

あら雲　火葬の煙うげ空ゐ映ぎるを見て今ここと推量るなり

かくやと見えたる。風さへすゞしく吹きたるに、ときどき此あたりちかう、あら雲のたちいづるハ、我君の有様と見ゆるに、ぜんかさなくかなしがりける。うへの倫子のはまへハ、はかうしをれろさで、やゞてはしにれはしまして、かの岩かげハいづかたぞなど、人ゐ問はせ給ひそ、そなゝざまになゞめさせ給ふに、あかき雲のゐゆゑバ、先それならんかしと、はぞの袖のミならず、はゐさへなゞれさせ給ふ。東宮ハ、こよひときこしめしたるゐあれバ、露まどろませ給はず。かのむかしの、楚王の夢をれぼしあはせられて、あさましくおぼしまどはせ給ふ。かやうにてやとぞ、人申いはせける。ほゞもなく雲となりぬる君なれバ、むかしのゆゑ

楚王の夢　文選巻十九宋玉が高唐賦序曰く昔者先王嘗遊高唐怠而晝寢夢見一婦人曰妾巫山之女也為高唐之客

聞君遊高唐願薦枕席王因幸之去而辞曰妾在巫山之陽高丘之岨旦為朝雲暮為行雨朝々暮々陽臺之下旦朝視之如言故為立廟號曰朝雲云々先ゐとハ楚懐王の事なり

衣の珠　世尊の名ハ大宮ハ法師ありて女院と申志ゝに皇后研子の奉れる四敷の袈裟ゝれりそのゐ敷おくゐあり

内の大とのゝ上のゐゐ云く　敷通の室ハ公任の女ふて早う失せ給ひしゐ後悔大将の奉ゐあ

のこゝちこそすゝ。かへもゞといへど、なほおぼしかけさせ給はざりつるゐありさまのミ心うくて、夜もあけぬれバ、殿のゐ前にハ、未幡へと覚しめせど、さまでいいゐでゐなど人々きこえさすれバ、こはだへハ、別當僧都播磨守やすミち、すべてさるべき人々ぞまるりける。

㊃ 衣の珠

四條大納言どのハ西の松ゐとのゝうへ（教通室）ゐ、ゐのゐ、ちハ、よろづうむゞはて給ひそ、つゝゞとゐれこなひて、すぐさせ給ふ。法師とれなゞじさまなるゐありさまなゐゞ、これ思へバあいなき事なり。一日にても出家のくゞく世にすぐれ、めでたゐなるものを、いまし

り
ロくしげ殿のロうな
名ハ皇子殿通の
女ゐて母ハ公任の
女なり後朱雀院の
女ロとなるるもをい
ふ
ロ在のつゝのさ 庄
園のあづかり役人
なり
女ロ 公任の妹ふ
て花山院の女ロと
ありしロ方なり

バしあるハ、御匣どのゝ御事などいできて、いとゞ見すてがさくわりふきロほだしにこそはせめ。さらバこの程こそいとよきほどなれとれぼしとりて、人ちれぞさるべきふゝども見ちさゝめ、ロ在のつうさどもめしてあるゐき事どもの給はせなどして、猫こゝしとたぼすに、女ロ(諟子)はなほ人ちきずあはれに心ぼそくたぼされて、人の心はいゝじういふがひなきものにこそありけるゐど、かくたぞゆゐからん。いとわれなゞらもくちをしうたぼさるゐし。なにごとかはあるとたぼしまはしつゝ、人しれぞロ心ひとつをたぼしまどはすもいゝじうあそれなり。このロほいのりといふ事ハ、女ロ(諟子)殿もちらせ給へれど、いつといふこゝいちらせ給ちぞかゝるほどに、ちひを人のもてまゐりたれバ、女御殿のロかたへ奉らせ給ける。ロ若のふたを、かゐしたてまつらせ給ふとて、女御(諟子)どの、

ありなゞらわかれんゝりハ中々になくなりにたるこのゝともがな。ときこえ給ひけきバ、大納言(公任)どの

のロかゐし、

わく山のちひがもとをしたづねこバ、とまるこのゝを、ちらざらめやハ」女御どのいとあはきとれぼさる。かくて大納言殿ハ、さぶらふ人ゝなどのひゝへにたのゝきこえたるをぞ、いとあまゝ見すてがたくれがさるゝにつけても、あはれにのゝれぼされて、まだきふかくいふことをちらせじとやれぼしけん。のた

このゝ 指木の実
ふ此の才とふを
かけたるゝ

四十五日云々　晴　蜻蛉日記ふ云五月廿五日ぞうりくうに十五日のいみさびへんとこのごさありきふるとりたるよ云く和泉式部日記ふ云此ほ八四十五日の四方たがへさせ給ふとそいひとこの三位中将の京ふおもしまる云々かくあれバ四十五日方たがへまるる定まれるおひと見えさり

二條殿　内大臣教通の家なり

まふ様ハ、なゞたに、堂たてんと思ふに、きたにありたれバ、いとれそろしけきバ、かの寺にとしのうちにいきて、四十五日そこまてすぐして、来年の二月ばりりになん、京にいづべきなどいふるをの殿はせつつ、よろづにあべいことをたぼしおきてけきバ、辨定きこゆりはじめたてまつりて、たゞさのこれぼしたり、我ロめれとの、年いこどうたいて、さるべき人々ふもわくれてたゞひとりとるこ殿をたのこたてまつりたるぞあるゞ中ふもあハきにいこどうたゞされける。それもこの頃ハ、もかなきるもあはれにせさせ給ふ。

公任室

あまうへも二條殿にぞ、この頃ハたはしましける。かくてなゞたにのロいでたちをせさせ給ふとて、かゝ

この僧のさるべきふもうちとらせんと思ふなりとて、わざともあらぬ法師のさうぞくをぞ、ひごろせさせ給ひける。志はその十六日の程なりけり。けふさるべき人々ふも對面しおぼしきるをも聞え給ちんと覚して、二條殿にれたまも。さるべきむつまじき人々、二三人をがりロともうて、参らせ給へバ、ロ門いらせ給ふ。ふるりはじめて、衰にこのたびだらりぞかゝとれゞすに、あやしう人わろきロいいできぬべきを、覚しまぎらはして、西の對ふれもして、ロくしげ殿（生子）をみたてまつり給へバ、まだいとをさなきわどなれど、人のいとやんごとなくてもてなゝかゝづきする奉り殿へきバ、ちいさながら、家のきこまてれをするロありさ

まゝとあそれようつくしう、かなしう見たてまつり給ふ。ひてならひをぞ、せさせ給める。中（生子妹）のきこえさせとをさなげなて、うちゑみてゐ給へり。ひくしげどのれひをならひを申して見給へばあそれようつくしうかゝせ給へり。たゞむかしこひしきふる歌どもを、返々かゝせ給へるまも、なこだとゞめらさくて、それまことづけてやゞてゐらせ給へば、ひくしげどのもいとゞうならせ給ふ。中姫君もかなしとたゞしそれどゝそれハものをづらしうて、れもてを引かめてゐ給へり。あそれまいとじうたゞやさきて、こたこゞりぞかしまさハいつゝえたてまつらんと覚しめすぞいみじうたへがたきやさてゐまやゝやとたゞしまぎ

除目　上に注せり
大宮の尼なりのすゑ
彰子の君尼にな
らんの由本さにて
その由文参あれハ
なり

二郎三郎　二郎ハ
通基と云ふ此時五
才三郎ハ信長とて
四才にまなれり皆教
通の男公任の女の
生む所なり
どゝめき　どゝと
ハさにぐ音なり

る〻程に、殿（教通）参らせたまへば、物まめやゝなるよのひ物ぐさり、らい移れ除目のことやまた大宮（上東）の尼なりのすやなど、たゞひ猶度どものいでくるをまたせ給ふなりと聞えさせ給ゐどに、二郎君三郎ぎこどゝめきてたはしてゝやゝおれはしたりけるをちらでいまゝでこざりけるハ、ちれたりけるわざゝな。あそれわれハくびにかゝらん。われハひざにこそるめなどきゐひあらそひさにぎあそせ給へば、（教通詞）いであなものぐるゐし。からうなつかうまつりそくと、制きこえ給ふにいづくかハ。あやふくにむつびきこえたまへバ、えちのびの所へ移さぞ。ひたもてに、ひそれ袖をたしあてゝなかせ給へバ、内（教通）のたゐとのハむかし

を見しいづると見えさせ給ふに、たへがたくて、やゞてさしむかひなりせ給ふに、口まへにさぶらふ人々も、皆おきにたり。なをいとわりなくれぼさるまゝに、かしこうためらはせ給ひてよろづふる物がたりありて、かへらせ給ふとて、尼うへの口かたにさしのぞうせ給へバ、れいのミドかきれ悩ひきよせく、ゐさせ給へり。ふりがたのロものはぢやと哀に見たてまつらせ給ひて、此君達のめづらしがりてれうじ給へるこそ、いミドうあはれにとて、又うちならせ給へバ、あまうへもやゞてやゞめさせ給はぬ程も、いミドうあはれなり。やゝ口物語ありて、出でさせ給ひぬ。四條の宮よりかゝらせ給へれバ、やがて女口（諟子）殿の口方にさし

ひえぐさ　檜皮葺のるなり上ふ注せり

まづあるもの　古今集雜下ふ　世の中のうきもつらきも思ふこふまづあるものハ涙なりけりとあるふよりこれも上ふ注しき

なふ〜きてを　一本ふてなふ〜ぐさてを」とあり考ふべし

いり給ひれば、ロれこなひの折せけり。なるるもあれふきこえさせ給ふ。このやに、今年ひはだをふらずなりぬることのくちをしさ。いたやハ雨の音ばかりぐましさこそ、すぢなく侍けれなどきこえ給ひて、ロ庄々のきぬなどをすゞやかに奉りはてぬ事のあやしさに、年かたりてぞ、ロつかひつゝそすべかめるおど聞え給ふ。哀にたのもしうれはせぬよにもあらバいうよ心ぼそからんと、まづたるものふれぼされけり。ねかへらせ給ひそくハ、我ロめのとのあまぎゝのがり、さしのぞゝせたまへれバ、やゝとかしこまるけはひも、いとあはれなれバ、ねにゝきてをとの給はせいかにぞ、さむくやものし給ふとの給はすきバ、さむきよや侍らん。時々ゝだりこゞちのあやまり侍ると聞ゆれバ、ロそをぬぎ給ひてこれをき給へ。これぞわたあつききぬとの給はすれバ、かしこまりてときこゆるけはひいとあはれにこだいなり。わゞこゝをいゝに思をんと、あはきにれぞかへり給ひぬ。さてつくゞと考しつゞくるに、むさましう心うきものハ、人の心にこそありけれ。よにある人の、あるハかかしき子におくき、あるハ女男の哀に思ふにおくれ、あるハはぢがましきすいできあるハさいはひなくなどして、もとも出家せんにあへぬべき人の思ひたゝぬハ、たゞかくにこそありけれ。ねぼろけに心よゝらむ人の、あべいことにもあらざりけり。かゝれば浄土にも

むまれ、佛にもなる人いすくなうりけりと、たぼしたる
らさせ給ふ。さてあけぬれバ、つごもりの程のすども
などゝ家司にめしれほせられなぶくまるに、左大辨参り
給へれバ、さるべき事なぶきこえつけ給ふに、辨のき
こかしこにいそじき鯉のさぶらひつる、きこしめさ
せばやゞ申し給へバ、精進ちゃくなるとて、人の魚く
ふいとほいなきすなり。との給はまれバ、いとくちを
しくてやゝ給ひぬ。かくて女房などにも、らいゐん二
月十日程にハ出ぬべし。そのほど心ぼそしと思はで
あるばゝりぞなゞの給はせて、つごもりの程のすど
もなゞ、たぼしおきて、たはすの十九日にぞなゞたに
へいらせ給へバ、女房などゝ、つれぐにあるべき正月ま

めりかしとく月日もすぎて歸らせ給べき程になむ
など申し思へり。辨れ君などみなゐおくりつかうま
つり給ひくあるべきすども聞えかはしてまろで給
ひぬ。そのゝちたびく参り給ふ。かくておくやまのゐ
もまるもほいあり。んのどかにたぼされて、年もくれ
ぬれバ、一夜ゞ程にかはりぬる峯のかすゝも、あはれ
ふゐ覺ぜられて、山里いかで春をたらましなどうち
かがめさせ給ふに、ついたちの日もくれて、二日たつ
のときばかり、辨のきゝまるり給へり。思ひかけぬわ
どのすかなとたぼさるゝに、ゐ裝束もたせ給へりけ
る。かくれのかたよりうるはしうして、ゐまへにいで
て拜たてまり給ふなり〻。人なろの折れゐすま

るだに、かほ（顔）わゞは心にハすぐれて見えたぽさるゝは有さまの、まいてさるやまのなゞたにのほとりにていハ、ひゝるやうに見え給ふに、あないとゞ、これを人に見せばやと、見るかひありめでたのたゞいまのありさまやと、人の子にてこんに、うらやましくもたらまほしかるをき子なりやゝめかたち心ばせ、身れぎえいゝでありけんとおはれにいとじうれぽさるゝにも、はなとだうかびぬ。さて山里の山あるじ、やこころふたたゞひをゝーきさまにそ、はともの人にも、はみき給ひてかへり給ふ。なごりこひしくなゞがめやられ給ふ。かくてついたちの日のつとめて、御堂に三井寺の別當僧都たづ祈ふは消息も乃せさせ給へバ、まる

山里ハ山あるじ　こゝのあるじハ饗應のすふてあるじまうけの略なり

り給へり。さて心のどかにハ物がさりなどありて、はほいのこともきこえ給へバ、僧都打なきて、はぐゝしれろし給ひつ。戒なゞどさづけたてまつり給ひぬ。かくてかへり給ひぬをバ、世にやがてもりきこえぬ。これをきこ一めーて、（道長）（法華）ふりは装束ひとくだりしてまゐらせ給ふとて、

いに一へハ、れもひかけきゃ。とりかは一かくきんぽとのりれころもを、はかをしなゞたにふり、おくれゞとちぎりかをちてきるをきを君ゞ衣にたちれくれける。」とぞきこえさせ給ける。

うくゝく帝御度共いできぬれバ、（上東門）大宮（万寿三年正月）この月のうちに、思したゝせ給ふ。はは屏風どもにハ、黄なる唐綾をは

この歌ども千載集十七雜中ふあり　詞書略も

此月のうち二六ゝ大宮ハ落飾の子當月中ふせさせ給ふべしとなり

らせ給へり。あたらしてさるべき心ばへあるゑども
を權大納言（行成）さまゝにかき給へり。ゐりにハからの錦
の地あをきをせさせ給へり。たそひにハ皆まきゑた
たり。うらにハ香染のかたもんの織物なり。ロ几帳を
も、うすかうぞめなり。ロ帳などもあをかうにて、紫檀
ぢなるにせさせ給へり。れほうたゝすロましのへり
まで皆ことさらなり。こづゝどもの蒔繪にハ、皆ほう
もんをまかせたまへり。いはんかたゑく見どころあ
りたふとし。ロ持佛のありさまなどいふもれろかな
りその日ふ成りて、のこる女房ゑくまゐりこたり。
高方女源三位道家女勢の中將中納言のあまなど皆まゐりたり。
その日の女房のなり、花城をりたり。月ごろハわれも

花城をり　裝束の美々しきを云ふ上

ふもありき

わをもと、ゑくれたてまつらじと申せ人のこれほう
りけるどもまことになりぬれバそらごとなり。そのゑ
たがへず世をそむきだなじ道にいる人々少將の内
侍、辨のきこ、辨の内侍、そめ殿の中將、筑前の命婦など
なり。この人々のなりどもたゞなる折だにあり。別れ
を惜しこたる、えたゝらぬめでたき中に、辨れないしゑ
ひたちぬるを、殿でらなどもいこゞうあはれゞりの
給ふ。宮（上東）のロありさまを見たてまつれバ、ゑ梅のおん
そを八ばゝりたてまつりたるうへに、うきもんをた
てまつりて、えもいはぞうつくしげにて、ロくしいた
けに一尺よばゝり、あまらせ給ひて、ロありさまさゝ
やかにふくらかにうつくしう、あいぎやうづきをか

しげにれはしまもせ。たゞいまの國王のゐたやと聞え
さすべきにもあらず。をかしげに女ゐなど聞えさせ
んによげなるゐゐ様なり。ことしハ萬寿三年正月十
九日、ゐ歳卅九ふぞたならせ給ひける。いとゞうわかく
めでたくれはしますに、あまのゐ装束いとじうせさ
せ給へり。ゐたつらひハ皆けさつかうまつりたれバ、
かうてれはしまさんもあしゝらず見えたり。殿道長の中
まへをはゞめ奉り、閑白頼通殿内の北方教通殿などおしこり
て見たてまつり給ふ。いとあヨたゞしくれぼえさせ
給ふほどゝ、ゐとかぶら参るべきゐさヨぐ程に、うち
よりなに経頼の辨ぞや。ゐつゝひふて、宮の使部ばらなど
さゝげて、きぬもてまゐりたれバ、ゐあのゝはしのも

ひけん　足緒ありとに、ゐつかひさぶらふ。ゐ文とりいまそて、ゐ覽じて、ゐ
つかひに禄たまはせ、宮の使部ばらにひけんたまは
するほゞのめでたさを、そこらまゐりこゝ給へる上
達部、山の座主院源權僧正明尊ゑゑめでたきことに申し
給ふ程に、又東宮後朱雀ゐりれなゞ様ゑてもてまゐりたり。
ゐつゝひさきのさまにて、かへさせ給ふ。皇太后宮中宮妍子
宮などゐり、みなゐ装束もてまゐりあつまりたれど、
ものさわがしさにまぎれて、ゐつゝひにげにけり。そ
のものどもあすゐらんぞ屋しかくて今ハならせ給
ふ。三位井ィ永円僧都ハゐいとこにて、ないげし給へれバ、それ
ゐぐしれろし奉らんとそある。閑白殿ゐはさゝ奉
らせ給ふゑ、ゐめもくれまどひて、いゝじうなかせ給

糸東記四月十九日條云、除爰社有ゐ出家子僧院源山座為戒師權大僧都永円剃ゐ頂云々ないげしハ内おしなり

ふに、との〻はまへ、かくなら せ給ふを、このよのはさいはひハきはめさせ給へり。後生いかにと思ひきこえさせ給へりつるに、いとうれしうゐやすきはをりとそ〻のかしきこえさせ給へれどさばかりめでたきはをりさまの、にはかにひきかへさせ給ふをバ、との〻はまへをはじめたてまつり、殿ばらうへの〻まへ、せきもあへずなかせ給へバ、宮の〻ゐいとあわたゞしげに覓しめしたり。年頃の宮つかさの民部卿俊賢、みものもとにていとじうなき給ふ。あさましくあはれなるはをりどもになむ。ぞんの内侍同日ひるいとどうさうぞきて、さしぐしにものいとをさへつけて、公ふるかげありつるほどハ、さいふともいかゞとれば、しめし

さしぐしふ物忌をさへ云々
枕草子ふ忌ぼしふも物忌つけしるえ

えたり物忌とハ柳の枝を三寸ばかりのれふ作り物忌とうきて付くる由あり

せんぜられぬべき云々　先ぜらるゝふて忌きゝたるものゝ人ふ先ゝたるふるまひありと感じたるなり

つるふつぼねよゆきてうちなりて、れしかをして、さやかにをらしげなる尼君のずゝひきさげて、いできたるに、あさましうあはれにて、殿ばらなをたまたちひあるものにハ、せんぜられぬべき物らなと、いとじう感じの給はせ。れまへをはじめたてまつり皆戒うけさせ給ひて僧たち禄たまはりてまかでぬ。いとじうゝつくしげにあまそぎたる、ちこどもの様にぞれはしまも。ゐぐしあげさせ給へりしゐ有様ふも、よろづ見えさせ給ふ。つきもせずめでたきゐさいはひありさまのきハ、かぎりなくれはしますを、いとじう見たてまつらせ給ふ。内ふりゐつかひあり。れりゐのとかどゝひとしきゐくらゐにて、女院ときこえさすべ

き宣旨もて参りたり。ロつゝひ御給はりてまゐる程、道長
とのゝロまへさくりもゝ〜になゝせ給ふ。ロまへの
火たきやとりいでゝ、陣屋こぼちなどまれば、衛士も
火をたきさゝして、いあわたゞしげにゐひたり。陣の吉
上涙をながしたり。いとどうめでたきロありさまな
るに、やむゐなき宮司どもハ、やがて院司に成りたり。
さもあらぬハ、はかるゝをいとどきこゑに思へり。民
部卿（俊賢）はやく院の別當になり給ひぬ。おなじ代ハ例の院
の藏人などにハあらぬ人のゐぞこなるゐなり。これ
ハこの院の藏人の中まも、やんごとなきをえりなさ
せ給へり。さまゞめでたし。又の日すこしのどかにれ
はしませバ、よべの宮々のロ消息どもとりいでゝロ

火たきやゝ〜大宮警衛の士のかゞり焚きて候ひし所なり上ゐ注しさ

覽ずれバ、皇太后宮（妍子）のロ消息に、ぢんのすゞにこゞ袖
の裝束して、ちろがぬのロはこにいれさせ給ひて桜
ぬつくりえだにつけさせ給へり。

かゝるらんころものうらをれもひやるなゝだや
袖のたまとなるらん。（にまり）とぞきこえさせ給ひける。

㊐わかえづ

かくて中宮（威子）、神無月になりぬれバ、左衛門督（教隆）乃家にい
でさせ給ひてれはします。とのゝ（道長）ロまへも、ひるぞロ
ぞへハれをします。よるハ此宮にれはします。うへの（倫子）
ロまへも、やがてれをします。さきゞの宮々のロ時れ
ロいのりどものまゝにせさせ給ふ。このたびハ、物の
れそろしさゆゝしさそひてれぞさるれバ、いとゞこ

かゝるらむ云々此歌新古今集雜下ふあり何ぞ略す衣裏珠も法華經ふ見えたる文ありさて之を表の名とれ已り水　此卷も方寸四年の春三宮母子の君の御湯殿ゆ水してまゐるとある例ふよりたり名つく

とまさり、ふろづにせさせ給ふ。さぶらふ女房たちの中ゐも、子などはらぐくしらずおなしたる人ハ、たづねさらせ給ひて、この程ハ參るまじきれほせことあり。内（後一条）ふりのハつかひ、ふる夜なりわかぬも、れろかならぬハけしきおるげあり。かくいふ程に霜月になりぬれバ、うちわたりのさまぐくのうども、わかき人々ハ心ひやりいふめり。よろづふりもれはします殿のせばけ給ぶ、こゝらさぶらふハ祈の僧ゐども、そのわくりのゐどものほどひろさに、おしいるさまにてこゝろたりたれほかたのハ心に、ともすれバ例ならぬ苦しげにのゝれはしませバ、殿ばらもおづこゝろなげにれぼしたり。まいてこの月になりぬれバ、またせ給ふこ

たちぬる月　去月をいふ月、日を経たちさる意なり

とそひて、れそろしうれぼさるだし。ハめのとにれとなび申を人れほかり。この殿のうちに、たゞいまハこのハるふりほかのうたなし。女房達人おをぬおろきもれどもいそぎあへり。ばゝなくて月もたちぬ。十二月ふ成りぬれバ、たちぬる月にだにされをしますべうりしに、あやしく心もとなさを覚しさわぎたり。ついたちもすぎゆけバ、いとあやしくいかにぬのゝれぼしめす程に、十日のひるつかたふり、れいならぬハけしきなれど、わざとも見えさせ給はねバ、心れぶゝるまゝにぞ、まことにくるしげれぼさるゝに、日くるゝまゝにぞ、まことにくるしげにれはします。このとのばらや、外のかんだち部もまゐりこゝ路ふ。こゝらの僧どもれこゐをあはせた

万寿三年十二月四日二条院に於て章子内親王あり後一條院の皇女なり

れとおきふて云々その後何のさともなきふて也平産なるゆゑ知らるとなり

たなゝ下うい云々同じくい男子なりましかをと思召さるとなり

るほどすぐて物も聞えぬぞとの〳〵はまへ、おやましくたぼさるれど、ごちんまるらせ給ふ。内より女院上東より
の口つかひ、つゞきたちたり。近江の三位宰相橘俊遠妻東光殿
となゝぶ〳〵皆まゐれり。いぬ女院のときばかりにぞ、いとたひらかにせさせ給へる。いまひとつの口ことをの〳〵志りたり。よろづにそのゐすどもをせさせ給ふ。その後ありさま、れとなきにて推量られたり。とのゝ口まへ、たひらかにれはしますより外の口ゐなし。物のこれそろしかりつるに、いのちのびぬるこゝちこそそれとていとうれしげにたぼしめしたりうちにもきこ志めして、れなゝうはといいこのでう覚しめさゞらん。されどたひらかにれはしますを、かへもぐも聞えさせ

さきぐい云々皇女ゐ口佩刀をもてまゐる作法のゐいつぶみ花の巻ゐ云へり

給ひてぐ口はゝらしもてまゐりたり。さきぐい、女宮にいは口はかしいもてまゐらざりけれど、三條院の口時、一品宮陽明門の生れさせ給ふりしようぞかくあめる。内ゐ女房などのおなくちをしなど申をきこ志めして、こいなにゐぞたひらかにせさせたまへるこそ、かぎりなきゐあれ。女といふも、をとこのゐなりや。むかし、かしこきこかどぐ、皆女帝立給はずバこそあらめどのたまはするに、かしこまりて候ふ。ぐしつきぐの口うぶやしなひゐどもつゞきたちたり。開白どの、女院、七目の夜い、十六日にぞあたらせ給ふる。れほやけようゝ、皆れいのさほうにゐすどもまゐれり。まことや、口めのといあまた申す中ゐ、まづとの〳〵宣旨のむすめ、出雲

八日人々色々の白衣　白屋の打ハ皆白裝束ふてあるふ
八日めふ色々の衣ふ替ふるふ定まれる作法ふりき

前司頼経がめをまづめしたる。八日、人々色々のそで
もあらためたるうちの女房達まゐりたり。さまぐれ
事どもあらまほしく、心もとなきふふくせさせ給へ
り。女房まゐりて、わゝ宮のうつくしげにれはします
よし申せバ、後一条
威子
めす。宮れはまへ、いつしかと思ふてきこし
ことにあさましきまで、志ろうめでたうつくしう
れはしますにぞ、げにれはうつりて、いゝじうかなし
うたてまつらせ給ふ。れはめのと、われもくと申せど、
志ぞしハとそめさず。日もはゝなくすぎて、十二月晦
日になりぬるバ、世の中の家々たゝきみじかき、皆そ
そぎみちたり。章子
わゝゝやのれとしのまさらせ給ふべ

かなしう　愛する
ふふなう　悲哀ふ意
ふハあちよ

そゝぎ　さゝぐ意
の河なり

きれいそぎも覚しめすに、夜のほどふろづかはりた
るもをかしう、あらたまの年ふりも、わゝゝやのれあ
りさまこそ、いゝ志うつくしうれはしませ。わゝ水
志て、いつしゝれゆどのまゐる。ふろづ皆はるのこゝ
ろつきて、そらのけしきもひきかへさまぐに、ものけ
ざやかにめでたきに、枇杷殿
なれバ、開白殿をはじめたてまつりて、ふろづの殿ば
らのこりなくまゐり給ふに、御前のにはけぢかく、を
かしき木もはなもゝぢもなけれど、うちつけのめふ
るべし。東の對の御志つらひあざやかにめでたきに、
寝殿を見れバ、ゝすいとあをやかなるに、くちきがた
のあをむらさきふにほへるふり、女房のきぬのつま、

若水して云ゝ　若水の名こゝの河ふよれり

臨時客　上ふ委しく注せり

袖口かさなり、なゝ外ふりハにほひまさりてみゆるハ、れほかた此宮の女房ハ、きぬのかずをいとれほうきさせ給へばなるべし。

玉れかざり　此巻の名ハ和泉式部ゞよめる歌の詞ふよるそのゑ歌ふのせたり

㊱玉れかざり

枇杷殿の御心ち、いとくるしげにれはします事、いとゞをけれど明尊僧都御修法三七日つかうまつり給へれど、れこたらせたまは祈バ、ならへさるべき人々二だん三たんつかうまつり給ふに、さばかりくる志げにれはしますに、力をつくし加持参るに、さらに御あくびをだにせさせ給はず。さるべき験祓かぢをつくさせ給ふ。八月にもなりぬ。月日のゆくもをらせたまはぬ御ありさまなれど、あはれに過ぎてゆく。か

枇杷殿　姍子

ならへ云々　此下脱文ふてもあるゝ強ひて云ゝゞ奈良へ人を召してさるべき僧ふ加持せしめしるあらむゝ

くてのゝやはらて、御修法の五大壇ふこもらせ給ひて、れ北れもてにひさしさゝせ給ふゞきさまよ、よろづ造りの、をらせ給ふにつけても、いとあはれなり。東宮ふりハ日々にの御つかひ参る。中宮女院　威子　上東門院いゝじうればしなげかせ給ふ。この御心ちハ三月ばゝりふりかれバ、此月ハ六月にならせ給ひにたり。露ものをきこしめさ祈バ、いまハたゞかげのやうにれをします。御いちもすこしさはやがせ給へバ、御湯殿とあるをりハ、かなへ殿いゝどうろこびをなして、つかうまつるも哀なり。女房たち侍どもゝ、やすきいもねず我もゑもときほひつかまつりて、かくありありて、いゝよ

かなへ殿　鼎殿ふて湯をゝ釜をあづられる役人なり

人ちれぞうちかたらひ、なこだをのごひつゝ、ありきあるり。ふるもそかうしもまゐら祢バ、やがてすのこになみゐて、かうらんにせおかをあてゝ、それをやすまりに祢ふりあつまり給ふ程、まことにこゝろぐるしうたへがたげなり。八月十三日御堂にこもらせたまはんとて、女房れなりつくろはせ給ふ。かくて此月もすぎぬ。九月になりぬれバ、夜ながになりまさりて、なやましきは心ちいとゞまさりて、まどろませ給ふるかたし。かゝりつかうまつりたる人々も、たけくれもへど、あまりになりて祢ぶりがちなり。ないしのすけいむげにほけて、ひるさへねぶりさぶらひ給ふ。と道長のゝはまへい、今ハ何るをかはずべからんとれぼし

かゝり仕うまる
そのゆゑ関し仕う
まつるものゝ

むげにほけて　ほくとハ耆の字のさ
なり老いてれろ
しく成れるをいふ

めしても、むゝしの鎌足のたとゞの、いこじうわづらひ、くゝ、よろづ志給ひけるとゞ、やまざりけるに、震旦よりわたれる尼の、維摩経供養したてまつりたるにこそ、たこたり給ひけれとて、奈良のそうどもりうせいをこじめとして、いせきけいきうやさるべき人々めして、維摩経供養せさせ給へど、たこたらせたまはずなりぬ。なほ今ハさるべき月日をまたせ給ふなんめりと覚し見たてまつらせ給ふにつけても、なこだとゞめがたく、我御命も志ゞまるやうにれぞさる。すべて今ハなこゆもたるしもなし。いゝでびは殿にて、いくともたぬをもとの給へど、いかでゝ口やまひのれこりし所へハれはしまさん。口ものゝけのれもはせた

維摩会の供養の日数
文長けをバ引ゝ也

鎌足のたとゞ云々
はゝゆ奥福寺縁起

いま南殿　新南殿と云ふんが如し

いを　魚をいをとも云ふい古言あり

てまつるなめりとて、九月七日のあゝつきにぞいま南どのにわたらせ給ふ。ゐ堂にていさりともとたばしめしつるに、れこたらせ給はぎなりぬるを、道長のゝゐまへも心うきこゝにたばしるゝり。寝殿の東たもてに、ゐちつらひしてたはします。この日ごろいをきこしめさでとてあれど、けふいあしき日、あす八日おれば、九日のつとめて閑白頼通殿よりさまゝのいをどももてまゐりたれど、すべてゐそをひきかつぎてきこしめすべきゐけしきおし。とかくよろづに試をさせ給へど、今ハかぎりとのゝ見えさせ給ふもいとじうかなし。かゝるほどに九月十餘日に成りぬ。こゝにもゐ修法あめの僧都仁海つかまつり給ふ。日頃ゐ堂にてく

るしうつかうまつりつる女房、さとにまかでゝ、あすの夜ばかり參らむとて出るもれほゝり。よろづの陰陽師ども、十四日にれこたらせ給ふべき日に申したりける、その夜ゐ前に人々さぶらふおともれば、れこたらせ給ひく、ものなどれほせられなどせさせ給ふと思ふに、十四日のつとめて、いゝでゆすこしあみんとれほせらるきバ、さぶらひめしてれほせるたぶに、かなへ殿よろこびをなして、いそぎつかうまつれど、すこしなりともたゞとゝくとの給はすをゝ、進物所のか絲やすに、たゞとくわかさせて參らせよと、女房いひたれバ、いそぎたちて參らせたれバ、ゐざまたりさせ給ひく、日頃の御まゝゐそ皆さりやらせ給

ひて、あざやゝなるロそたまゝなどにふさせ給ひて、殿たはせふとあれバ、かくと人まゐりて申せハ湯にまゐりおりたり。たゞいまゐると申させ給へるに、かぎりと見たるにぞいそぎのぼらせ給ひてロ湯ゝたびらかゞられはゝまゝたるに、ロけしきのれいならぬたもしませバ、やゝまゐりてべると申させたまへバ、ロぐゝそぐま絲をせさせたまへハ、尼にならせ給はんとやと、申させ給へバうなづかせ給ふを、なくかくなゝ奉らせ給ふ。ロ戒うけさせ給ふに、たもつとの給する程、いとさはやかなり。倫子うへのロまへも、いまぞわたらせ給へれど、ロめもくれまどひて、何ゐもロ覧じわゝぶ心譬俗都けう教円ゐんこ講などゝさるべき僧

中納言ちゝ納言を大と中と顛倒せるからん

どもあつまりて、加持まゐるに、ロけしきの宗かはりにゝはらせたまへバ、中長家納言殿大能信納言殿など候はせ給へバ、彌陀佛と申させ給へと申させ給ふに、いとよく申させ給へバ、この僧達心あるたゞしうかゞ参りて、うけ給ふもいとこしうかなし。内にもとにもゆすりあひたる程に、殿ゐらをはじめ、世の人々まゐりこそゆすりこちたり。うせもてたはするまゝに、とのゝロまへあなかなゝや。老たる父はゝをおきて、いづちとてれはゝますぞや。ロとともにゐてたそしませと、こゑをたてゝならせ給ふに、このさとにまかでたりし人人も、いつのまにゝまゐりあつまりたりけん。いといみじうゆすりこちたり。三月八日よりなやませ給ひ

て萬壽四年九月十四日のさるの時に、うせさせ給ひぬ。そのいとあざやかなるうへに、とのゝ御こゝろもけさを、うへとりたほはせ給ひて、あざやかなるゆそひきかつぎてふさせ給へり。ゆぐしはるたけぞかりにやそゞせ給へらむと見えさせ給ふ。ゆひぎはのかゝりそゞせ給へるなりけり。かくて七々日のゆ有様せさせ給ふ子どもえかきつゞけず。此たびのゆ佛つくらせ給ふゆかざりのゆれうにい、大和守やすまさの朝臣のがり、玉をめしにつゝはしたれい、京の家にたてまつるべきよしいひあげたれバ、まるらすとていづこそへたり。

かずならぬなこだのつゆをそへてだに玉のかざ

かずならぬ云々 此歌玉葉集十七離

四ふあり巻の名この歌ふるより

日かれふし 此歌こそその結びきかゝれるといひたるゝニハ整えず漢りかとも思へと古今六帖巻五小載せなる歌ふも

こんといひて来ざりしよるもゆしかバ結さぬしるもこそ結つふまきれふと云ふが見えたれバ歌ふいまれふかゝる例もふるなる歌し

つるの林 巻六 道長公の四葬送の郡野ふてありしふ忠命内供のよめる歌の詞を以て名つ

りなゝまさんとぞれもふ。れなゝじゆ料のたまを權太夫為政ためまさがこひたりけをバ、赤染衛門あかそめ、

わかれにしたまハかへもにかたけれど涙のそこそ袖にかゝれる」

道長とのゝゆ心ちもこぞゝりかくふやましうれはしませバ、ゆ重のゝふるひるいそがせ給ふ。この宮のゆゝれ後、いとゞ苦しうふりまさらせ給へれバ、あはれに心ぞそくれぼさる。

（三十）つるのはやし

日ごろになるまゝに、いとくるしげにれはします。十道長ノ病 万寿四

一月になれバ、妍子やの御正日のゝせさせ給ひつ。内後一条春後朱雀宮にも、この御悩をいとゞきこと思ふぼしめしなげかせ給ひたり。ゆゝ千俄にれもきにハれはしまさ祢

けたうその歎奥ふ
あれバ例のひうた

ど、こぞより例のやうにもたはしまさず。ものきこし
めさでひさしうふらせ給ひたるふ、この宮（妍子）のゐるを、
いとしうわぼしめしぐづをれさせ給ひつるつゞき
ふれバ、かくいと弱げにたはしまもなりけり。月ごろ
もすべてゐいのりたえてせさせ給はぬ。たゞこのゐ
堂のうちれゐ佛を見給ふるを、ふるひるいとなゝ覚
しめして、やもきいも御殿ごもらすなどありけもバ、
いかにとのゝ、殿ばら宮ばらわぼしなげゝせ給へる
に、かくさへたはしませバ、いと心うくわぼしなげか
せ給ふ。わゞゐ心ちにも、このたびハかぎりのたびな
り。さらゐ〳〵ものさゝがしき有様あらでありなんと
の給はも。すべて物をつゆきこしめさ絲バ、いとたの

もしげなくたはしまます。とのゝうへ（倫子）女院（上東）などわたら
せ給ひてなく〳〵見たてまつらせたまへバ、とく〳〵か
へらせ給ひ絲とのゝ申させ給へバ、心のどゝならぬ
をくちをしう心ぐるしうたぞしめさる。内春宮より、
御つゝひむまなくまるる。かゝるゐとゝいゝどうなゝ
せ給ふ。女院（上東）うゐのゐ（倫子）まへなどハ、はじめよりたはし
ませバ、中宮（威子）さへにたはしまさん事と、いとびんなき
事なり。ことのわづらひあり。はやう西殿へわたらせ
給ひ絲ときこえさせ給ひけれど、たゞかくてたはし
ます。とのゝ（道長）ゐいとくるしうならせ給へバ、このた
びとたぼしめして、年ごろゐをづからかゝせ給ひけ
るゐさうし、二三帖ばかりさぶらひけるを、女院に奉

風吹くと云々　はた
歌付いひはらぬ心
ちして解しがたし
強て読みの云々
風八方の風まで
風吹くばさそれ
行かむとて昔の人
の言の葉をかきあ
つめ君がためぬ形
見として送しをく
との意ともあらむ

ら せ給ふとて、道長殿、

風ふくとむかしの人のことのはを、君がためにぞ
かきあつめける。ひかる、上東門院、

なぐさめもこだれもしつゝまがふかなことのを
にのこかゝる身なれば」又道長との、

ことのはもたえぬべきかな。世の中に、たのむかた
なきもこぢばの身は、かくて日ごろふならせ給へば、
ほいのさまみてこそいと、たなじくはとて、阿彌陀堂に
わたらせ給ふ。もとの心念誦のまにぞ、心ちつらひし
てはしますたかき屏風をひきまはして、たてさせ
給ふ。人まゐるまゝにくかまへさせ給へり。ことなること
となければ、たきあげらせ給はぬ。なほ物露きこしめ

せと殿ぢら申させ給へば、いこじうむづからせ給ふ。
後一条
うちふりも後朱雀東宮ふりも、かく今まで見奉らせ給はぬ
なげきの、心消息しきれば、よからん日してれはしま
させ給へかし。たゞ思ふていとなめげにふしぶし
ら心覧ぜんずを思ふなり。さらば、よき日してと、のた
まはす。この月廿五日、よろしき日なれば、その日行幸
の心用意あり。春宮の行啓は、たなじ日なるべけれど、
心あてたゞしかるべければ、たなゞ月の廿八日とさ
だめさせ給ふ。さてその日になりて、辰のときばかり
ふ行幸あり。昨日心ぐしなどそらせ給ひ、心けさころ
もなど奉らせ給ひて、世のつ絲の心有さまにて、心脇
息にたゝかゝりてはします。後一条へいといこじうあ

この月廿五日云々
扶桑略記万寿四
年十一月条云廿六
日壬戌大皇行幸法
成寺依入道大相國
病也云々
百練抄同年月条云
廿六日行幸法成寺
依入道大相國病也
云々
かくて見えてこゝと
日数たゞへり。小右
記ふも廿六日行幸
廿九日行啓ともあ

れバ本書ハ一日と、たゞへたるなり

父みかど母ぎさき云々　天皇行幸あり て病を労ひ給ふ すハ父帝母后のれ 悩ふらでハ其例ふ きすとん

はれに見たてまつらせ給ひて、せきもとゞめずなか
せ給ふ。あさましうあらぬ人ゝほそらせ給へるぬあ
りさま、哀にかゝしく心うく見たてまつらせ給ふ。帝詞さ
てなにすをゝ、わぼ〜めすことゝていあるときこえ
させ給へバ、いまハ此の世ゝをべて思ふ事候をず。世道長詞
の中ふれほやけのぬうゝろゝ、つかうまつりたる人
人れほかる中ふ、あゞりてもかゞりさいはひあり、
すべきすのかぎりつかうまつりたる人、さぶらはず
侍る。まづハれほやけのれほぢやをぢやなどこそい、
かやうにて候ふに、まだかゝるをりの行幸候はぞ。ち
ちをかど母ぎさきのぬすにこそい候ふめれ。それす
らさ〜もあらぬたぐひどもあまたさぶらふ。まづち

うハ、三條院、六月にくらるにつゝせ給ひて、十月七
日冷泉院のぬ心ちれもらせ給ひし行幸あるなくれ
ほせられ〜かど、諸卿のさだめに、なほぬものゝけの
いとれそろしうれはたゝますすし申侍ちかバ、行幸候
はずなりにきなど、いとさはやうに申しつゞけさせ
給へハ、此ぬ心地ハ、ちからなげさのいをゞきにこそ
あんめれ。ぬいちハゆめにかはらせ給ふことなし。あ
はきやをめたてまつらばやとれぼすに、いをかなし
うて、わぼさんまゝの事の給へて、ゝへもぐ申させ給
へバ、すべて云ふすす候はぞ世をゞまりてのち、この好
き事そハためし〜に候ふめれ。これ〜ゝりほゝのすハ、何
事かハ。たゞ〜この世ぞのすつかうまつりつるれの

こどもをなんひとつのゐをせむと、ゐひたまへつる
と申させ給へバ、いとやすき事なりとて、關白殿れか
その家司、因幡前司ちかたゞをバ、よりあきらゞゝは
りの美濃になさせ給ふ。ちもの家つゝさ左衛門尉た
めかたをバ、使ゝけさせ給ふ宣旨くたさせ給ふ。また
四位にハ、五百戸の御封よせさせ給ふ宣旨なじく
くだりぬ。道長とのゝ四まへいそぢう、宇れしきれほせな
りとかへもぐなくくよろこび申させ給ふ。倫子うへハ又
なほごとをもと覚しめさるれど、又申させ給ふるあ
きを、くちをしうれぼしめさる。女院上東のゝかたにいら
せ給へれバ、女院いそぢくなかせ給ひて、とのゝいそ
じう宇れしきことに、よろこびなき給ふゞ、かへもぐ

使かけさせ　検非違使為長イ
違使ゝ系任せしかる歟し
小右記せ六日条云
封戸五百戸被入法
成寺云々

うれしきことゝハ、よろこび申させ給ふ。あなれにゝう
きこと見給ふるとゝいそぢうなかせ給ふ。中宮威子さてれ
はしませハ、れなでさまのゝるどもこそハ。對面など
ハとそにえあるまぢきにこそなど、あはれにかたら
ひ申させ給ふ。さていとゝくかへらせ給ひぬ。
十二月二日、常ふりもいと苦しうせさせ給へバ、女院
中宮上のれまへも、いとゆゝしう宇ひたてまつらせ
給ひて、關白頼通どのに、せちに申させ給へバ、人々いだし
て見たてまつらせ給ふに、あはれにかなしういみじ
うて、ほとくゝこゑたてさせ給ひつべし。さてかへら
せ給ひぬれバ、僧たちちかう候ひて、四念佛をしてき
かせ奉る。されどその日れこたらせ給ひつ。この経内

四日巳時ばかりと云々　百練抄万寿四年十二月四日条云入道太政大臣道長薨于無量寿院十三云々扶桑略記小右記ともみ年六十二とかうてはあとれなし

四むねよりと又ハ云々　はるか小右記ふも見ゆ云々今宮時巳入滅云々此腋聊有温氣夜半許入滅云々

春宮より、四つかひいとどかりつ。今になほよわげにれはしませど、たゞこの四会佛れれこたらせ給はぬにのゝ、れはしますぢやうにてあるなり。又の日も、いまやゝと見えさせ給へれど、ことなくてすぎさせ給ひぬ。四日巳時ばかりにぞうせさせ給ひぬるやうなる。されど四むねよりかゝハ、まだれなじやうにあたたゝにれはします。なほ御くちうごゝせ給ふハ四念佛せさせ給ふと見えたり。そこらの僧なゝだをなゞして、四会佛のこゑをしまずつかうまつり給ふ。臨終のをりハ、風火まづさるゞゆゑに、とう絲ちして苦れほかり。善根の人ハ、地水まづさるがゆゑに、緩慢してくるゝとなゝ。をこそハあんめれ。されバ、善根者と見

字あるべし

えさせ給ふ。あはれに内東宮の四つかひぞひまなき。日頃いとじうゝのびさせ給へる殿ばらも四まへたち、聲もをしませ給はぬ。げにいとじや。四堂のうちのあやしの法師ばらの、ものの思なげなりつるゞ、にはのまにふしまろぶげにいとじ。世界のたふとき尼法師さへあつまりて、佛の世よいで給ひてよをわたし給へる、絲はんのやまにかくれ給ひぬ我らゞごとき、いかにまどはんとそらんなど、いひつゞけなくも、いとじうかなし。夜ふかすぎて、ひえはてさせ給ける。御棺ハなやとそめさせ給ひし日より、つくらせ給へれバ、やゞて入棺ゝたてまつりつゝみどう四こゑどもまさなきまでれはしまさふ。又の日、陰陽師めしてとは

ねぞんの山ゐ云々　佛入滅のゆゑい

たえしまきふまさふハますを延べ

たる月なり

せ給ふふゞ日の夜せさせ給ふべし。ところは香隠野とさだめ申してまかでぬ。七日ふなりぬれバ、つとめてふりいそぎせさせ給ふ。れいの子ども推量るべし日くれぬれバ、ロをにかきのせたてまつりて、わはしますに、その日つとめてよりふるまで、雪いとゞしうふる。さるべき人々れいのさうぞくのうへに、あやしのものどもきて雪きえあへずふりかゝりたるも、さまざまにあはきふかなし。ふろづゝそぎて、たゞかたのやうにとたほせられけまぶ、ゝすゝぎりありて、人のつきたちたるほど、十世町ばかりあり。ぬ殿しいまハいでさせ給ふ。無量壽院のみなゝの門のわきの、みゝどよりいでさせ給ふ。かの釋迦入滅の時、かのくしゐ城

くしゐ城　拘尸那城とか〳〵

城は東門より、出させ給ひけんにたゞひたる事なし。九条二条あつまりたりけんにも、をとらであはきなり。こゝ乃世界のあまども、心をつくして参りおくりたてまつれど、そこらある人なれバ、いづれとも志りがたし。萬壽四年十二月四日うせさせ給ひて、ついたち七日乃夜ロ葬送、御年六十二にならせ給ひけり。儀式ありさまに、夜もたゞふけにふけもてゆく、所々の会佛僧、奈良三井寺、ひえ石藏仁和寺、摂河法性寺、すべていひもやらず。かずをつくしたり。山座主、御導師つゝまつり給ふ。猶はゞめをはりまちびきたてまつるべきにこそ有りけれ。さきだちたてまつるやうもあらましかばと、まづかなしくなゝだをかゞし給ふ。さて

山座主　院源僧都なり

えつかまつりやり給はぢ。よふけてなりやこいと志づうなるにいひつゞけ給ふこと、いとゞしきおこだのもよほしなり。淨飯王入滅度のあ〜た悉達太子白か祢のひつぎをになひ摩耶夫人真如にかへり給志ゆふべ、五百羅漢くれなるの涙をなゞ〜きぞ不生不滅れ佛すら、なほ愛別離苦、無去無來をはなれ給はぢなどいひつゞけ給ひて、六道ふあひ給はん佛幷に申給ふべきやうなど、一々につゞけ申し給ふ、諸行無常是生滅法生滅々已寂滅為樂、その處なにの心ら有ると問ハゞ、すなわち尊霊こたへ給ふべし、諸行無常ハ天上にのぼる智恵のはしなり。是生滅法ハ愛欲れ河をわたる般若乃船なり。生滅々已ハつるぎの山をこゆ

淨飯王　釋迦の父ふて悉達ハ釈迦の小字摩耶夫人ハ其母なり真如ふかへるも死もるのなり

尊霊　ここハ乃志の霊ゆさして云へるなり

る寶車なり。寂滅為樂ハ淨土にまるる八相成道の義果なり、無量無數の賢衆きたりて、この所ハいづれの経論の文ぞとゞはゞ、こたへ給ふべし。諸行無常ハ增一阿含経の文なり。是生滅法ハ大般若経の文なり。生滅々已ハ花厳経の文なり。寂滅為樂ハ後教涅槃経の文なりとこたへ給ふべき也。此娑婆世界ハねゞひすむべき所にもあらず。輪廻のくらるひさしからぬ。天上のたのしきも五衰はやくきたり。ないし有頂も輪廻期なし。いはんや世の人をやゝとゝ願とたゞひ苦と樂とゝもなり。かるが故に経ふのたまはく。いづるいきいいるいきをまたず。入る息はいづるいきをまたず。たゞ眼の前にたのゐびさり。かなしびきたるの

五衰　一ハ身光不現二ハ花鬘変萎悴三ハ四腋汗流四ハ体便臭穢五ハ不樂本座とて天人と云へども此五つハ遂ふ免れぬことなり

かいしハ　乃至の字なるべし

人天けふしてこゝけふハ協の音からむゝ

そならず。又命終にのそむで、罪にたゞひて苦に落つ。尊霊この西方世界ふむまれ給ひなゞ、樂をうけ給いん時極もなゝく、人天けふしてあひ見るゝを見給ひ又かぎりなきたのしびをえ給ふべし。かるが故に、この世界につゆの心とまらず。佛のゆをしへのごとくにて、さいごの時念佛みだれさせ給はざりつたのもしきゝか。今ハ極樂の上品上生の位と、たのゝたてまつるなゞ、いゝじうあはれにかなし。かやうの導師などハ、いゝじきゆ門の君と申せど、たゞことのはじめをこそよむめれど、年ごろのゆ師弟子のちぎりにたはしましつれバなゝく残りなゝく、無常のさほうをもさるべきゝをも心のかぎり申し給ふ。ぜんこうたふ

定基僧都 流布本ふハさだめき僧都とあれと淡み誤りて仮字かぎふもたるなるべし

くたふとくかなし。諸行無常のおゆをバ、たゞ涅槃経の偈とのみこそおもひたりつれ。ほくのゝどもゝたり給へりける物をうべこそ雪山童子身にもかへけめときく人々のゝあり。六道の佛并のゆ名どもなゝく、ふく皆いひつゞけ給へれど、えきゝとゞめずなりぬることそくちをしけれ。さてよろづにかなしくてあかつきがたにぞ、とのばらさべき僧などあつまりて、ゆ骨ひろハせ給ひてかめにいれて、右中辯章信のりあぶかけたてまつりて定基僧都もろともに、木幡にゐてたてまつりつさべきとしごろの人々、ゝな参る。さて殿ばらかへらせ給ひて、ゆ室ふ皆れはしましぬ。何ゝもあはれにかなしかりつるに、忠命内供といふ人こそ、

けぶりたえ云〻
此歌後拾遺集十哀傷ニ載せ〻り鶴の林ハ天竺跋提河の辺娑羅双林をいふ釈尊其中間ふて入滅しなれバ〻

たき〻つきといそ
ま法一云〻　けぶりたえの五文字を改めたしのさゝ
うそハ北本涅槃経第六ニ如来入於涅槃文彩畫火滅とある本文を思ひ寄せてなるべし

とりべのにてたぼえけれ。のちにもりきこえたりし、
けぶりたえ、雪ふりゝけるとりべ野ハ、鶴林のゝ心ち
こそもれ。となんありける。かれ娑羅林の涅槃のほど
をゝ〻たるなるべし。なが谷の入道殿ハきゝ給ひて、
たきゞつきといはまほしきとぞの給ける。

標注榮花物語抄巻五終